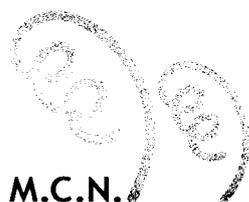


# 地域交流研究センター一年報

平成 20 年度

VOL.11



三重県立看護大学  
地域交流研究センター

## 巻 頭 言

本学の地域交流研究センターは、平成 9 年 4 月の大学開学と同時に附置施設として設置され、以来 12 年間、地道な活動を続けてまいりました。公立大学の使命の一つに地域貢献があります。本学は三重県で唯一の県立大学として、いち早く地域と密着し、三重県民の保健・医療・福祉の質向上の視点からどのように地域に貢献できるかを考え、ケアモデル開発や具体的な実践活動などを行ってまいりました。これらの実践活動により、看護学を具現化し、地域貢献とつなげる実践活動ができていくことは喜ばしいことと考えています。

初期の活動は、三重県の行政区分であった県民局を単位とした活動、ケアモデル開発などをめざした研究活動、県民に対する直接的なケア活動、看護職者への継続教育活動でした。その後、自己点検・自己評価する中で本センター活動を見直し、組織・体制の整備と建て直しをはかり、現在は「課題研究」、「地域専門ケア」、「研修・研究支援」という組織・体制で、教員全員がセンター活動に関わっております。

平成 21 年 4 月には本学が独立行政法人化され、これまでの「地域交流研究センター」は、名称を改め「地域交流センター」とし、ヘルスプロモーションの概念を活動の基盤にして、活動をさらに充実、発展させていきたいと準備しております。

日ごろから本センターの活動にご理解いただき、ご指導・ご協力を賜っていることに感謝し、この場をおかりして御礼申し上げます。これからもよりいっそうのご支援、ご協力をお願いいたします。

平成 21 年 3 月

三重県立看護大学  
学長・地域交流研究センター長  
村 本 淳 子

# 目 次

## I. 課題研究

夢が丘ハートネットワーク構築事業に関する研究 .....	1
------------------------------	---

## II. 地域専門ケア

1. 女性のための健康相談および不妊相談事業の支援 .....	7
2. 1型糖尿病をもつ子どもへの支援 .....	11
3. 「健康の郷・美杉」ヘルスツーリズム支援事業 .....	14
4. 認知症地域支援体制構築推進事業への支援 .....	19
5. 外国人の保健医療サポートシステム開発事業 .....	23
6. 三重いでんネットワーク支援事業 .....	27

## III. 教育・研修開発および産学官民共同研究

### 1. 研修支援プログラム

1) 看護研究の基本ステップ .....	31
2) 夢が丘県民講座（ケアする人のセルフケアセミナー） .....	37

### 2. 研究支援プログラム

1) 特定地域研究支援：山田赤十字病院 .....	39
2) 特定地域研究支援：紀南病院 .....	41

3. 産学官民共同研究 .....	43
-------------------	----

## IV. 資料

1. 情報発信 .....	45
2. 地域交流研究センター事業パンフレット .....	46
3. 地域交流研究センター事業決算及び予算 .....	54

# I . 課題研究事業

# 夢が丘ハートネットワーク構築事業に関する研究

学内研究員：野呂千鶴子、日比野直子、中北裕子、松田陽子

## 【研究要旨】

看護職者は、高い専門性を持ち、人々の生命と日々向き合っていく仕事をしている。このような中で、看護職者の「燃えつき」などの課題も指摘されており、看護職者自身が、自ら知識・技術を高め、誇りを持って仕事ができるためには、心身の健康が保持されるようサポート体制を整備する必要がある。本研究においては、本学卒業生がイキイキと看護職者としての職責が果せるよう、いつでも“心のきずな”にアクセスできる卒業生サポートネットワーク（夢が丘ハートネット）構築をめざし、卒後動向の把握及び卒後支援に対するニーズ把握、卒後支援プログラムの提案を行うことを目的とする。また、災害等健康危機発生時に、本学卒業生として自信と誇りを持って援助活動が行えるための夢が丘ハートネットの機能を明らかにし、基盤を整備する。以上の2つの目的を掲げ、平成19年度に本研究を立ち上げた。

昨年度に本学卒業生サポートネットワークの構築のために、卒業生を対象に卒後動向の把握及び支援ニーズについて基礎調査を行った。その分析結果より卒後動向として約7割が看護師、2割が保健師として就労しているという状況下において、卒後1年での困難な事柄の有無については、約8割以上が何らかの困難な事柄を感じながら職務についていることが把握できた。また卒業生の約3割が転職経験者であり、母校に対して「転職・再就職情報の提供」「看護系の研修会希望」「メンタルサポート」「卒業生間の交流の場の提供」等の期待や希望が寄せられた。さらに昨年度に卒業生支援プログラム第1回として行った「こころに響くコミュニケーション」では、「癒された」「業務でも活用していきたい」等参加者の満足度が高かった。

これらの結果に基づき、平成20年度は、1) 卒業生及び看護職者の離職予防に向けたメンタルサポート、2) 本学地域貢献の一環として災害時拠点構築とスキルアップの2点を目標として、事業展開を行ってきた。

今後は、1) 燃え尽き予防し、いきいきと就業している期間が少しでも長く入られるよう離職防止への支援をめざす卒業生支援プログラムの検討 2) 災害時拠点としての機能の充実 について継続して検討していきたいと考える。

## 【地域貢献のポイント】

1. 三重県立看護大学卒業生として、4年間の基礎教育で培った知識・技術力を基盤に、継続して看護職者として就労することにより、県民の皆様に、質の高い看護、保健、医療の提供が行えることをめざし、メンタルサポート・キャリアアップ研修を中心とする卒業生支援プログラムの検討を行う。
2. 東海・東南海・南海地震発生時に、甚大な被害が予想される三重県において、毎年100名の看護職者を輩出する本学の健康危機管理時における使命として、災害時に卒業生が中心となって、地域住民の心身の健康回復への支援を率先して行うことができるよ

う、拠点構築整備、関係団体やボランティア・NPO等とのネットワークの構築を行う。

## I. 研究目的

1. 本学卒業生が本学卒業生であることに誇りを持ち続け、イキイキと看護職者としての職務が果たせるよう、本学と卒業生の「心のきずな」を結ぶための支援ネットワーク（夢が丘ハートネット）を構築する。
2. 東海・東南海・南海地震等災害発生時における県民の皆様の健康危機管理として夢が丘ハートネットの果たす役割及び機能を明確にし、本学及び卒業生が日常・災害時等の非日常時において果たす社会貢献にとしての基盤整備を行う。

## II. 活動内容・経過

1. 燃え尽きを予防し、イキイキと就業している期間が少しでも長く入られるよう離職防止への支援をめざす卒業生支援プログラムの検討

### 1) メンタルサポートを中心とした卒業生支援研修会の開催

**目的:** 夢が丘ハートネットの卒業生支援の目的として、「日常から離れること」「自分への癒しの時間を持ち、明日への力とすること」「研修で得られた技術を周りの人々に提供し人間関係を良好に保つこと」、さらに「タッピングタッチが災害時のケアとしての効果を発揮すること」を学ぶ。

**背景:**

- (1) 看護職者は、自分が働いていることや対象者の状態に寄り添う看護を展開していることに対する自己効力感・自己肯定感が低く、新人期の離職や中堅期のバーンアウトが問題視されている。そのためのメンタルヘルス対策がとられているところである。
- (2) 災害時に看護職者は最前線で活動する職種である。自分が被災者であっても自己犠牲のうえで、看護に専念したり、惨状を目の当たりにしながら、働き続けることにより、心身ともに疲弊することになる。
- (3) 本学の卒業生を中心に、看護職者が自分自身に目を向け、セルフケア能力を高め、心身共にバランスよくイキイキとした生活を送ることをめざすことは、本学の地域貢献でもある。

**研修会:**

「こころに響くコミュニケーションⅡ」

- (1) 日時：平成 21 年 3 月 18 日（水）13:30～16:45
- (2) 場所：三重県立看護大学大学院講義室
- (3) 講師：中川一郎先生（ホリスティック心理教育研究所）
- (4) 内容
  - ① 参加者同士の交流を図る。
  - ② タッピングタッチの技法を習得する。
  - ③ タッピングタッチの活用方法（日常の看護場面・生活場面、災害時看護場面）について考える。
  - ④ 「癒し」「癒され」体験を通して、参加者がリフレッシュし、明

日からの仕事への意欲を高める。

## 2) 同窓会誌に事業内容の紹介記事を掲載（印刷中）

同窓会誌に、「夢が丘ハートネットワーク構築事業」の目的、19年度アンケート調査結果とそれに基づく20年度事業の紹介、今後の方向性について説明した記事を掲載した（印刷中）。

## 2. 災害時拠点としての機能の充実

### 1) 災害時看護研修会

目的：地震発生メカニズムについて理解するとともに、地震発生時に、その場に居合わせた看護職者として必要な行動がとれるよう、「その時」を具体的にイメージしながら、モチベーションを高める。

(1) 日時：11月20日（木）（13:00～16:30）

(2) 場所：三重県立看護大学大講義室

（遠隔配信にて、県立志摩病院、紀南病院）

(3) 内容：

① 「地震を知り、地震に備える ～ 大切な人を守るために」

三重県防災危機管理部地震対策室

緊急支援G専門監 橋村 清重 氏

三重県内で地震が起こったと仮定した場合の被害の規模と自分たちができる減災・自主防災に向けた取組みについて、阪神大震災等からの教訓も踏まえて講義していただいた。

② 「災害への備え – 看護からの提言 –」

兵庫県立大学地域ケア開発研究所 所長

兵庫県立大学大学院看護学研究科教授 山本あい子氏

阪神大震災を経験した大学として、看護の立場からの災害への備えの提言をしていただいた。まず、災害レジリエンスは、日頃からの地域の防災力・自治力を基盤とした「安心・安全・命」への備えのうえに立ち、個人あるいは地域が強さとしなやかさを持って立ち向かい、「生活」や「健康」を再建していく力であり、この力の備えの重要性を訴えられた。また、減災に向けて実際の見取り図から危険カ所をチェックしたり、防災用品の備えについて具体的に考える演習にも取り組んだ。遠隔配信先の病院スタッフとのやり取りから、実際の現場での備えと今後の課題についても参加者一人ひとりが考える機会になった。

(4) 参加者数：卒業生、大学院生、市町村及び保健所保健師、訪問看護ステーション看護師、福祉施設職員、学部生 等 57名

遠隔配信参加者 14名

(5)参加者アンケートの結果

①参加者の研修満足度については、図1-2に示した。

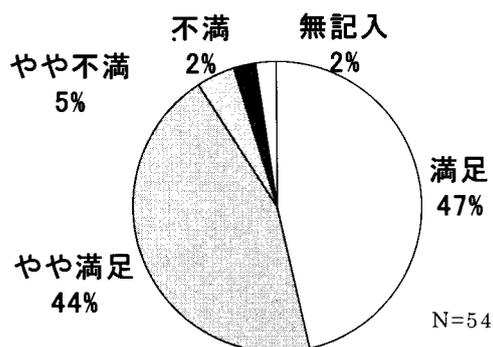


図1 研修満足度

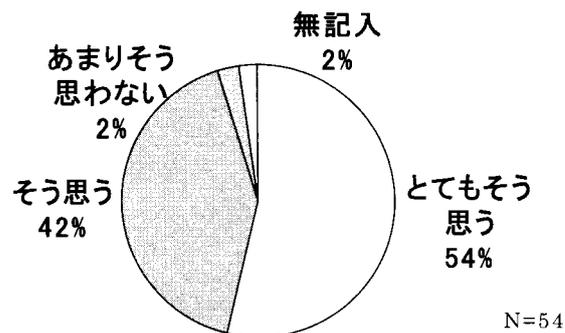


図2 今後の研修の必要性



②今後希望する研修内容

- ・在宅介護での災害対策
- ・在宅にいる方々への安否確認や支援体制の構築について
- ・災害頭上訓練
- ・災害医療センターの機能、役割と周辺医療機関の連携について

2) 災害時拠点機能の整備・充実

(1) 初動時に必要な物品等の整備

避難袋、食料品、衛生用品、ラジオ、懐中電灯、トリアージタグ、大規模災害訓練用外傷セット、AED（成人、小児使用可）等、初動時に必要な物品を5名分、約10日間を整備した。

(2) 災害時看護啓発のための書籍整備

災害時看護スキルアップのための参考文献及び小学生を対象とした減災、自主防災力を高めるための書籍を整備した。これらは、今後本学の地域貢献として、看護職者、ボランティア、小学生とその保護者への災害教育を行うための資料としていく。



#### IV. 考察

##### 1. 燃え尽きを予防し、イキイキと就業している期間が少しでも長く入られるよう離職防止への支援をめざす卒業生支援プログラムの検討

卒業生の本学への期待である「メンタルサポート」については、今年度は「こころに響くコミュニケーションⅡ」として、昨年度に引き続きタッピングタッチを用いた研修会を開催した。参加者が看護職者の就労形態である三交替勤務の中で日程調整を行うことができるよう、同窓会と協力をしながら昨年度より余裕を持って参加を呼びかけた。しかし、参加申し込みは決して多くはなかった。これは夢が丘ハートネット活動は立ち上げたところであり、まだまだ卒業生支援の活動としての認知度が低いことの表れであり、今後は参加者が参加しやすく、有意義な研修会を行っていくために、日程調整や連絡の時期などについて、同窓会や卒業生とともに検討する必要があると考える。また、今年度は県立志摩病院・紀南病院にも遠隔配信を行うため、本学までは来れないものの勤務先の病院内で、テレビ会議システムを通して研修を受けるという受講者にとって参加しやすい研修形態の工夫も行った。これにより、研修の成果が県内各地に浸透しやすくなり、受講者と教員のコミュニケーション、受講者と職場のコミュニケーションが円滑に図られるようになってきたのではないかと考える。

##### 2. 災害時拠点としての機能の充実

災害看護や活動に関する研修会は、参加者アンケートの結果から「満足」「やや満足」と回答したものが 91%であり、参加者の満足度は高かった。また今後継続した研修会開催の希望が 96%であり、災害看護に対する関心の高さがうかがえた。

今回は、大学、県立志摩病院、紀南病院の3点を結び研修会を行い、意見交換や自室や勤務する病棟の図面を記し、危険箇所や防災グッズの置き場に色つきシールを貼り、災害時の避難経路が確保されるかといった演習も取り入れられ、受講者が積極的に参加することができた。このことが、研修に対する高い満足度としてあらわれ、今後の継続した研修希望につながったと考える。

今後の希望する研修内容は、在宅療養者に対する災害時対応や安否確認・支援体制に関すること、災害図上訓練といった災害発生に備えた平常時の体制整備に関することへの希望があげられていた。地域の病院では、災害発生時のマニュアルや地域救急医療体制の中での役割について、行政等との協議によりある程度は明確になってきている。しかし今回研修希望の多かった在宅看護領域では、訪問看護ステーションの規模はそれほど大きくはなく、利用者の家が点在していることやスタッフ数から、災害時にすべての利用者の安全・命・生活の確保等災害レジリエンスの充実強化が求められるところである。

今後は、災害レジリエンスの充実強化を目的とした研修会を開催し、卒業生を中心とする看護職者のスキルアップを促すことで、災害時の看護力を高め、夢が丘ハートネットが災害時の拠点として十分機能していくための段階を踏まえた研修を計画していく必要があると考える。そのためには、今年度準備をした大規模災害外傷用セットを用いたトリアージ訓練等実践力を高めるための研修、避難所や救護所設営・救急対応に関する図上訓練等本学と行政や関係団体、ボランティア、NPO等と協働で行う研修企画も重要であると考えます。

備蓄品については、順次揃えている途中であり、災害時支援にあたる卒業生を中心とする看護職者の「安心・安全・命」を保障するものとして、今後さらに充実を図る必要が残されている。

## V. 今後の課題

- ① 卒業生（同窓会役員を中心とする）の声を反映させた卒業生支援プログラムの実施：メンタルサポートを中心とした研修会の継続実施、再就職やキャリアアップを支援するプログラムの検討
- ② 災害時拠点としての体制整備：災害時拠点としての夢が丘ハートネットの果たす役割の検討、行政・医療機関・消防・自治会等の協働のあり方の検討
- ③ 災害時拠点でリーダーシップが発揮できるよう卒業生を中心とした看護職者とのスキルアップ：看護職者対象の災害時看護研修の実施・・・本年度整備した大規模災害外傷キッドやトリアージタグを用いたシュミレーショントレーニング、実際の避難所での活動や行政・医療機関・消防・自治会との役割分担・協働を考える図上訓練の実施の検討
- ④ 地域全体の災害時看護力の充実強化：県内看護職者を対象とした災害時看護スキルアップ研修の実施を検討、

以上により、卒業生支援の充実及び災害時における本学の地域貢献の充実を図る必要がある。

なお、本研究で得られた内容の一部を「卒業生のサポートネットワーク構築と健康危機管理時の社会貢献に関する基礎調査 第2報」として第61回三重県公衆衛生学会にて発表した。

また、「看護大学における卒業生サポートネットワークの構築を目指した卒後動向の把握及び支援ニーズに関する研究」として、2009年8月号保健師ジャーナルに掲載の予定である。

## Ⅱ. 地域専門ケア事業

# 1. 女性のための健康相談および不妊相談事業の支援

担当者：二村良子、崎山貴代、中山優子、小村明子、田中利枝、永見桂子

## 【事業要旨】

地域の保健医療福祉ニーズに基づいて、地域住民・行政機関・保健医療福祉職者とともに地域における実践活動支援を行う地域専門ケアにおいて、女性のケアとして、女性のための健康相談や県が実施している不妊専門相談センター事業の運営への協力を行う。

## 【地域貢献のポイント】

1. 県内の女性のライフサイクルにおける健康問題で悩む人々の支援を行う。
2. 不妊相談員への助言、情報提供、学習支援、相談活動の支援、「三重・不妊に関する勉強会」の開催・運営が円滑に行えるように支援を実施する。

## I. 活動目的・目標

1. 三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」の相談事業に協力し、女性のライフサイクルにおける健康問題で悩む人々を支援する。
2. 三重県健康福祉部こども家庭室の「不妊専門相談センター事業」として、本学にセンターが設置されていることに伴い、事業の円滑な運営に協力・支援を行う。

## II. 活動内容および経過

1. 三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」の相談事業への協力
  - 1) 「三重県立看護大学助産師による女性のための健康相談」として第1～4木曜日の13:00～15:00に電話相談を担当する。
  - 2) 「フレンテみえ」との合同会議により情報交換や相談事業の評価を行う。
  - 3) 学習会により相談員としての知識・技術の強化を図る。
  - 4) 広報活動により、電話相談事業の普及を図る。
2. 「不妊専門相談センター事業」の運営への協力
  - 1) 不妊相談員への助言、情報提供、学習支援を行い、相談活動を支援する。
  - 2) 「三重・不妊に関する勉強会」の開催・運営を支援する。

## III. 活動の成果

1. 三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」の相談事業への協力
  - 1) 電話相談  
三重県男女共同参画センターフレンテみえの相談事業として「三重県立看護大学助

産師による女性のための健康相談」（電話相談、第1～第4木曜日 13:00～15:00）を平成13年度から担当し、女性のライフサイクルとセクシュアリティ、周産期における相談を中心とした内容に関する相談に応じている。相談者の主訴とその背後にある真の訴えを情報収集、アセスメントし、介入、評価を行った。評価については、その場で解決と判断するものと、未解決により他職種に相談をつなぐものがあった。

平成20年度（平成21年1月31日現在まで）の相談回数は38回、相談件数は79件であり、昨年度同時期までの相談回数とはほぼ同じであるものの、相談件数は増加した。ライフサイクル別相談件数は、『成熟期（周産期以外）』が17件、『更年期』が13件と合わせて全体の約8割を占めた。また、昨年相談のあった『思春期』、『成熟期（周産期）』、『老年期』は0件となった（図1参照）。相談内容別相談件数（図2参照）は、複数回答であるが、79件あり、昨年同様18件と「メンタル」が最も多かった。その他、「子育て」11件、「経済的・社会資源」12件と、これらの相談は増加傾向にあった。電話相談の問題内容が多岐にわたるようになってきており、助産師としての責任範囲を超える事もあり、連携先を確保する必要性があると考えられる。

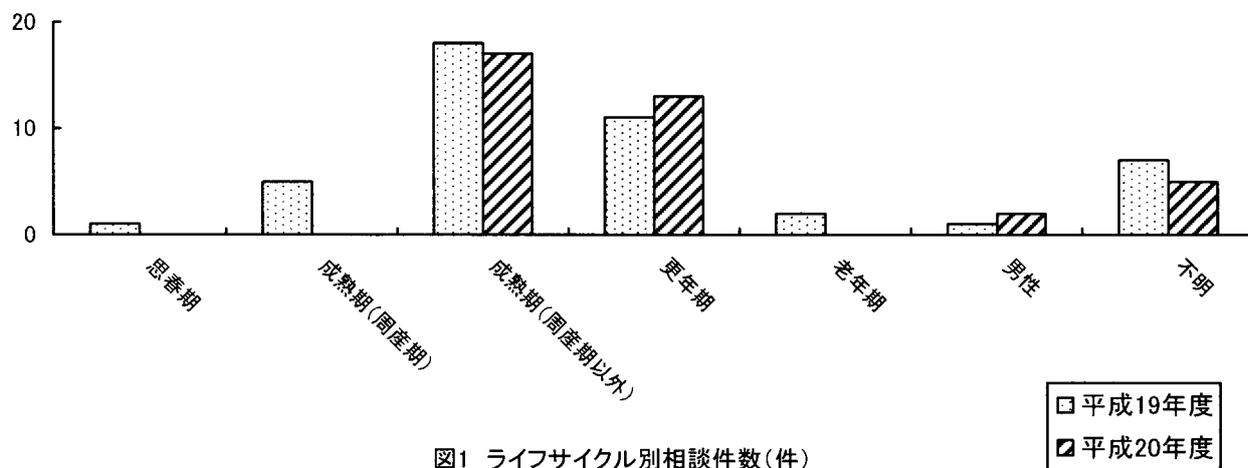


図1 ライフサイクル別相談件数(件)

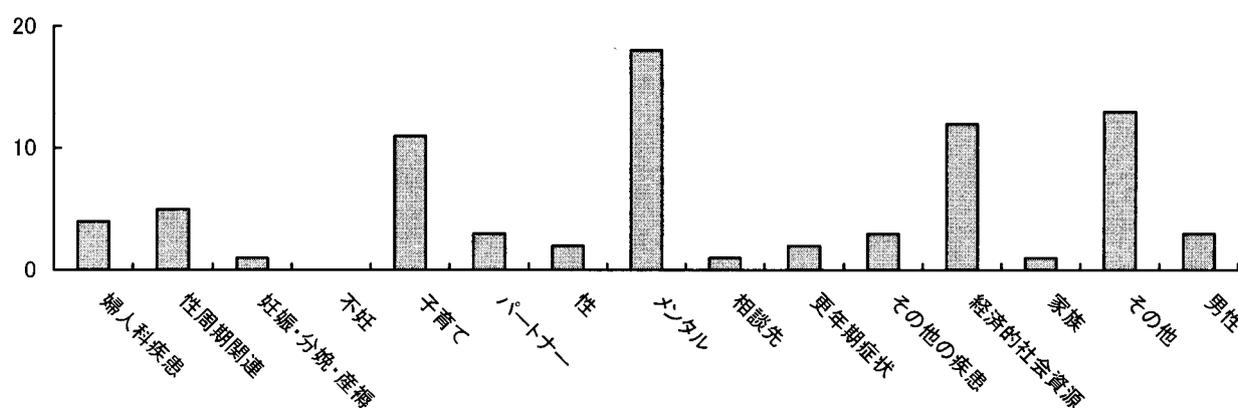


図2 相談内容別相談件数 複数回答(件)

## 2) 「フレンテみえ」との合同会議により情報交換や相談事業の評価

相談終了後には、フレンテみえの相談員に、その都度状況報告を行い、適宜相談方法に関する助言を受けると同時に、9月に行われたフレンテみえと当大学の担当者の

参加による合同会議の中で、看護者の視点や役割、相談員との共通点など相談事業について確認し、電話相談件数減少への対策および今後の連携の方向性などを話し合った。相談件数の減少について、本事業に関する広報活動に課題があると思われ、現在の実状と県民への周知を目指した今後の広報活動の方向性について検討した。さらに、地域住民との交流を図り、相談事業を広く知っていただく機会として、「フレンテまつり」への参加を提案され、現在検討中である。

### 3) 学習会

各教員が関連学習会や研修会へ参加することにより、最新の知識や技術を習得し、相談に還元できるように努めた。また、2009年2月に開催された「フレンテみえ合同相談員研修」に参加し、大阪心のサポートセンター代表理事によるジェンダーの視点による「相談者のエンパワメントに役立つ相談とは」をテーマに講義を受け、実際の相談事例を用いて検討を行い、一般電話相談員、男性電話相談員とともに相談の視点や方向性について理解を深めた。

### 4) 広報活動

電話相談件数の増加を図るためフレンテみえと協力し、相談案内パンフレットの配置を検討した。本年度の広報については三重県健康福祉部を通じて、県内各保健福祉事務所および関連機関など11施設に配布し、地域の方々に対して相談事業の案内を行った。さらに、県内97施設の産婦人科およびクリニック等にも三重県産婦人科医会の協力を得て電話相談に関する広報資料を発送し、相談事業の周知を図った。

## 2. 「不妊専門相談センター事業」の運営への協力

### 1) 不妊相談活動における支援

#### (1) 不妊相談への助言

##### ① 相談状況の把握 (図3参照)

平成20年度(平成20年12月31日まで)の相談回数は35回、相談件数は112件と、前年度と同様の傾向にあったが、再相談が33%と増加傾向にある。相談内容については、不妊治療を受けていない者やセカンドオピニオンのニーズをもつ者などの『医療情報に関する問い合わせ』が94件、本当に妊娠するのか、自分は妊娠する人とどこが違うのかといった『妊娠に関する不確かさ』が50件、医療者に対する不満などの『医療者や治療環境とのかかわり』が23件といったところの問題が約半数を占めていた。

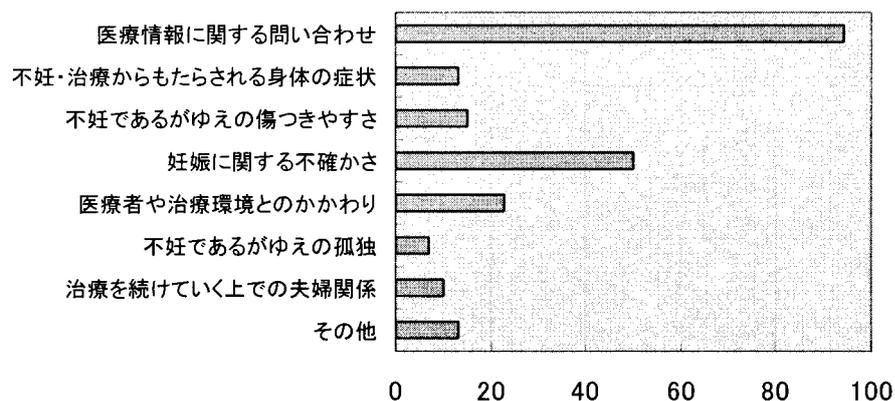


図3 三重県不妊専門相談センターにおける相談内容(件) (n=112 複数回答)

## ② 相談内容についてのアセスメントや看護介入の確認や助言

適宜、相談員の看護観やアセスメント能力、コミュニケーション能力、関係形成能力の把握を行い、相談事例についてのアセスメントや介入の確認を行った。

## ③ 相談員の感情の把握

相談における感情コントロールの必要性から、適宜、相談員の思いや感情について確認した。対応が難しい事例や継続事例については、適切な評価が営まれるよう、注意を払った。相談員は相談における自己の傾向について認識し、改善に努めていた。

### (2) 情報提供

最新の情報や不妊看護についての動向について情報を確認し、部分的に提供した。

### (3) 学習支援

#### ① 事例検討

学内の担当者を交えて事例検討を行う他、医師や看護師、心理職などと事例検討を行う機会を設けることができ、看護者としての介入や役割を確認することができた。

#### ② 書籍や文献の提供

#### ③ 国内・県内で行われる関連学習会や学会、研修会の紹介

### (4) 不妊症看護認定看護師研修の教育支援

不妊症看護認定看護師研修の依頼があり、研修者に向けて教育支援を行った。その結果、地域で行われる不妊看護や相談におけるシステム活用などの理解につながった。

### (5) 行政への助言

事業における今後の課題について、行政に求める内容を提案した。

## 2) 「三重・不妊に関する勉強会」の開催・運営の支援

勉強会でセンターの現状を報告する機会が得られており、報告準備の支援を行った。これは間接的に施設のケアの改善につながり、三重県全体の不妊医療における看護者の役割の明確化の一助となっている。

## IV. 今後の課題

フレンテみえにおける相談では、「経済的・社会資源」、「メンタル」についての相談や、治療内容および疾患について医師の説明で不明な点について尋ねられる等がみられた。相談内容が多岐にわたっており、助産師の責任の範囲を超える内容も含まれるため、今後も相談内容についての知識の習得とともに、他職種への連携などの必要性が示唆された。さらに、大学内あるいはフレンテみえの相談員との合同事例検討を行い、支援の方向性や連携について検討していくこと、また双方に関連するテーマにおける学習会の開催などを引き続き行っていく必要があると考える。今後は、本年度行った電話相談の広報の方法・内容を評価し、相談事業をさらに充実させる取り組みが求められる。

「不妊専門相談センター事業」の運営への協力では、再相談が増加傾向にあることから、今後は看護方法の検討と同時に、相談方法や回数などの検討によって対象のニーズへの対応が可能となると考えられる。その点については、行政との検討が必要となる。

このように活動内容の詳細な検討により、よりニーズにあった対応を行うことは、県民への貢献、全教員の看護実践能力の向上に寄与すると考える。

## 2. 1型糖尿病をもつ子どもへの支援

担当者：前田貴彦、落合春香

学外協力者：平田研人、若林美乃里、東岡史、鈴木香苗、大河内美穂

### 【事業要旨】

平成20年8月に四日市少年自然の家で開催された、第35回東海地区小児糖尿病サマーキャンプスタッフとして、キャンプ参加経験の少ない医療スタッフを中心に支援・教育を行った。また、企画を担当する学生ボランティアの育成および企画運営への支援を行った。

年々、キャンプ初参加の医療スタッフが増え、継続的な参加が難しい状況において継続した参加が可能である学生ボランティアに対しキャンプで活用できる実践的な学習会およびキャンプ期間中の医療スタッフへの教育・支援を行った。

### 【地域貢献のポイント】

1型糖尿病をもつ子どもは10万人に約1人と少なく、各学校に1人いるかどうかという状況の中、子どもや家族は今後病気とどのようにうまく付き合っていくか悩み解決できずにいる子どもや家族も少なくない。

そのような状況の中、小児糖尿病サマーキャンプにおいて、子どもは、同じ疾患をもつ仲間と知り合う機会となり、ともに不安や悩みを共有し、新たな目的・目標を見つけることができる。

また、家族にとっては医療スタッフからの専門的な助言だけではなく、同じ疾患をもつ子どもの保護者同士で交流を深め、ともに情報交換できる場である。このように小児糖尿病サマーキャンプの存在意義は1型糖尿病をもつ子どもや家族にとって、非常に大きい。

しかし、その運営に必要な医療スタッフや学生ボランティアは、小児および1型糖尿病患児のケア経験の少ないものが大半である。1型糖尿病患児の看護を含めた小児看護経験を有し、過去のキャンプにて医療スタッフリーダー経験を数多く有する担当者の存在は、参加医療スタッフや学生ボランティアへの支援・教育において重要であった。

さらに、医療スタッフや学生ボランティア育成を行うことでキャンプに参加している患児とその家族にとって、よりよい糖尿病キャンプの運営に繋がった。



## I. 活動目的・目標

自己管理が重要となる1型糖尿病をもつ子どもと家族にとって必要となる、疾患教育や仲間との情報交換および保護者間の連携を図ることができる重要な機会となるサマーキャンプの運営および子どもや家族への指導的役割を担う医療スタッフと学生ボランティアを育成することで、よりよいキャンプの運営となり、ひいては1型糖尿病をもつ子どもと家族のセルフケア能力の向上に資する。

## II. 活動内容および経過

### 1. 小児糖尿病サマーキャンプ企画運営の支援

キャンプ参加学生ボランティアへの1型糖尿病に関する勉強会を開催した。また、キャンプ準備委員会、学生ボランティアの企画会議に出席し助言を行った。キャンプ当日においては、学生ボランティア企画の運営支援を行った。

### 2. 小児糖尿病サマーキャンプ参加スタッフへの教育・支援

サマーキャンプ全体グループオリエンテーションへの参加と助言およびサマーキャンプ開催中を通してのスタッフへの助言および指導を行った。

## III. 活動の成果

### 1. 小児糖尿病サマーキャンプ企画運営の支援

#### 1) 8月に四日市市で開催された小児糖尿病キャンプの運営支援

主に学生ボランティアが主催する企画への支援を行った。

キャンプ終了後の参加者からのアンケート結果において、学生ボランティア主催の企画に対する評価は高かった。

#### 2) 学生ボランティアスタッフへの勉強会の開催

キャンプ参加前に1型糖尿病に関する勉強会を開催したことで、学生ボランティアスタッフとしての役割を理解することができた。また、キャンプ当日は参加者に対し、主に日常生活の側面への指導・助言を行うことができた。

#### 3) 学生ボランティアの企画会議での助言

学生ボランティアの企画会議に出席し、キャンプ当日に行う企画の内容を検討する際の助言および準備のついて支援を行った。



### 2. 小児糖尿病サマーキャンプ参加スタッフへの教育・支援

キャンプ開催中に参加者の生活指導を中心に行う看護リーダー、看護スタッフ、医

学・看護学生への助言や指導を行うことで、グループ運営の円滑化だけでなく、参加者が自己血糖測定、自己注射、食事指導を通し、参加者のセルフケア能力の向上に繋げることができた。

キャンプ終了後には、参加者の保護者から子ども達が家庭では実施できなかったことを身につけることができ、キャンプに参加させて良かった。今後の家庭・学校生活に大いに役だち子ども達自身の自身に繋がったと思うとの声が聞かれた。

また、初回参加のスタッフからは、キャンプの意義が理解でき、スタッフがどのような役割を果たすべきかを考えることができ、今回の学びを次のキャンプに活かしたいと、スタッフの継続参加への意欲にも繋がった。



#### IV. 今後の課題

キャンプ経験者およびキャンプ運営経験のある医療スタッフが不足しており、継続した参加ができる学生ボランティアの存在は大きく、キャンプの中心を占める学生ボランティア主体の企画運営を支援していくことが、1型糖尿病をもつ子どもと家族のよりよい生活へと繋がる。

よって、今後は学生ボランティアのさらなる支援と医療スタッフに対する1型糖尿病およびサマーキャンプに関する支援にも重点をおく必要があると考える。





力を五感を通して感じたり、森林環境の立地から気候・地形等を活かして身体運動を行ったりすることによって心身の休養や疲労の回復に役立てるとともに、健康への気づきを体感させ、セラピー体験後の日常の生活習慣の改善に結び付けることを通して人々の心と体の健康づくりに森林環境を積極的に活用していこうとするものである<sup>1)</sup>。津市美杉地域は平成20年4月に森林セラピー実行委員会（所管林野庁）より、快適に森林セラピーを受けることのできる「整備された森林環境」と、検証に基づく「生理・心理的効果」がともに認められ<sup>2)</sup>、「森林セラピー基地」として認定された。

本事業は、「森林セラピー基地」である美杉地域を中心として津市が実施する「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」への企画立案・実施・評価に参画を行う。ヘルスツーリズムを「人の移動と交流を基盤にエコロジカルな自然環境、森林、農村体験などを通じて、自然と伝統文化に触れ、癒され、元気になり、前向きな気持ちで、心も身体も、社会面も健康でよい方向に向けていく取り組み」と位置づけ、美杉地域の特性を活かした「健康・自然・観光・人々」が繋がった健康増進の方法を開発することを目的とする。

## II. 活動内容および経過

### 1. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画立案への参画：「森林セラピー基地」等視察

森林セラピー実行委員会に認定された散策路「セラピーロード」全8コース中、「高東山コース」「霧山コース」「三多気大洞山コース」「平倉コース」の4コースを2日（平成20年4月21日、6月30日）に分けて視察、また同時に地域資源などの視察も行い、後日（7月18日）意見交換を行った。

### 2. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画実施への参画：「森林セラピー」モニターツアーの参加および各種測定・調査

平成21年度秋に予定されている「森林セラピー基地」グランドオープンに向けたモニターツアー（11月15日開催）において、津市保健センターと連携して各種測定・調査を実施した。



【血圧測定】



【モニターツアー】

君が野ダム湖畔コース  
セラピーロード

3. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画評価への参画：「森林セラピー」フォーラムへの参加  
平成 21 年度秋グランドオープンに先がけて津市が主催する森林セラピーフォーラムにおいてモニターツアーの成果報告（平成 21 年 3 月 1 日開催）を行った。

### Ⅲ. 活動の成果

1. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画立案への参画

1) 「森林セラピー基地」等視察

安全で快適なセラピーロードとなるよう、歩道路面や休憩施設などの整備に向けての提案を行った。各ロードへの案内看板、地域資源の開発の可能性および拠点施設の活用方法について来訪者への利便性の向上を図るための意見の提言を行った。  
＜具体的な提案内容＞

ヘルスツーリズムが美杉地域に根付き、その活動が地域に還元され、そして地域で継続していけるような内容の充実が必要との提案を行った。

- ・ ヘルスツーリズムのキーワード：癒し、和らぎ、食、運動
- ・ ヘルスツーリズムの対象者：美杉地域住民の方々、美杉地域を訪れるの方々
- ・ ヘルスツーリズムの枠組み：森づくり、まちづくり、家づくり、おもてなし企画、健康づくり企画、ひとづくり
- ・ ヘルスツーリズムの具体案：「歴史探索コース」、「風の音・せせらぎの音コース」、「田舎暮らしコース」、「手作り満喫コース」、「自然おもてなしコース」など



【屋外会議】



【美杉地域特産 あまご】

2. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画実施への参画：「森林セラピー」モニターツアーの参加および各種測定・調査

11 月 15 日に行われた「君が野ダム湖畔コースセラピーロード」モニターツアーに参加し、津市保健センターと協働して各種測定・調査を実施した。

以下、モニターツアーで行った調査結果概要を述べていく。参加者は全 49 名、年齢は 18 歳から 82 歳の平均 58.9 歳であった。参加者に日常の運動習慣を尋ねたところ、毎日運動を行っている人が全体の 36%、週に 2～3 日以上運動を行っている人が全体の 82%と日常的に運動を行っている群の多い参加者層となった（図 1、2）。モニターツアーにおける運動量は「少なかった」と回答した人が全体の 59%

を占めていた（図3）。この理由として、モニターツアー当日の悪天候に伴って勾配の少ない比較的歩きやすい「君が野ダム湖畔コースセラピーロード」が選択されたことから、日常的に運動習慣のある参加者にとっては運動量として少なく感じる結果になったものと考えられる。また、今回モニターツアーにおいては質問紙調査、ライフコーダによるウォーキング歩数・消費カロリーの測定、唾液アミラーゼによるストレス調査、血圧測定を実施したが、概ね肯定的な評価が多く（図5）、企画内容としては好評であったと受けとめられる。

さらにこの「森林セラピー」の第一の効果として期待される「癒された」実感については、「あった」と回答した人が61%を占めていた（図6）。記述記載において「癒された」内容としては、「普段以上に自然を感じる事ができ、季節を味わい程良い運動量でたいへん満足出来た。気分が良くなった。」「自然の変化を体感。空気が清く、ロードのゆるやかな変化（坂の上下など）、心身の面においても、仲間と談笑でき語り合えたこともプラス。」また雨が上がった時間であったことから「紅葉（雨上がり）湖畔のコントラスト」なども癒しの効果をもたらすものとしてあげられていた。一方、「癒された」実感が「なかった」理由としては「人と話しながら歩いたのであまり実感が無い。」の記載があり、談話をしながら歩くことによって「癒し」の感覚が弱まるとの意見も聞かれた。

これら得られた調査結果を津市保健センターと共有し、グランドオープンに向けた健康プログラムの開発等に結果を反映していくよう計画している。

### 3. 「地域かがやきプログラム南部エリア事業の位置付ける、森林を活かしたヘルスツーリズムの推進」の企画評価への参画：「森林セラピーフォーラム：森からのめぐみ～いま、私たちにできること～」への参加

モニターツアーにおける各種測定・調査結果の成果報告を行い、シンポジスト及びフォーラム参加者が今後のセラピー基地の活性化にむけて「いま、私たちにできること」についての意見交換を行った。

## IV. 今後の課題

平成21年度秋に予定されている津市「森林セラピー基地」グランドオープンに向けて、本年度の活動をふまえて引き続き美杉地域の住民や行政との連携を深め、健康増進の取り組みについて検討していく。健康ボランティアの育成をはじめとして「森林セラピー基地」を活かして、地域住民の健康な暮らしや生きがいがいづくりに寄与できるよう、教育研究機関の立場で地域貢献が行えるよう、今後の参画方法を検討していく必要がある。

### 引用文献)

- 1) 国土緑化推進機構（2007）：森林セラピーへのいざない。国土緑化推進機構。
- 2) 森林セラピー基地全国ネットワーク会議：森林セラピーポータル。（2009.1.30）  
<http://www.forest-therapy.jp/>.

資料:「森林セラピー」モニターツアーアンケート結果 (一部抜粋)

図1. 日常的にどの程度運動を行いますか

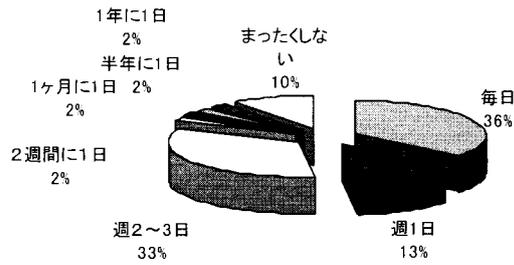


図2. 日常的にどのような運動を行っていますか

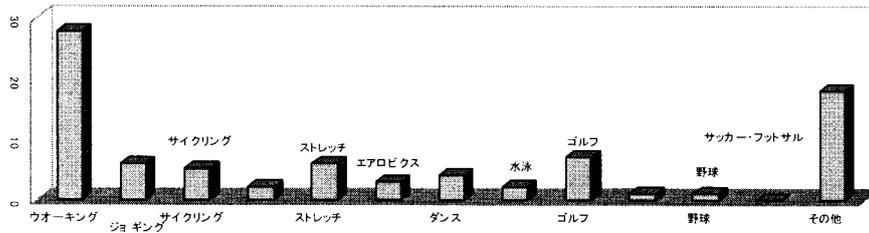


図3. モニターツアーの運動量は

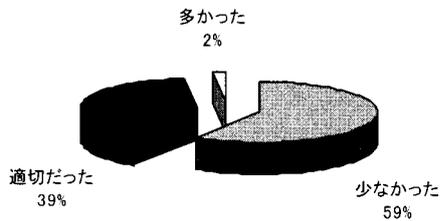


図4. 日常的な運動への意識に影響はありましたか

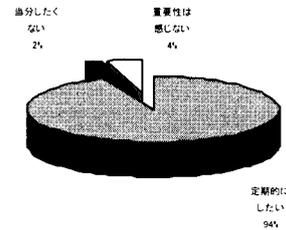


図5. 今回の企画について

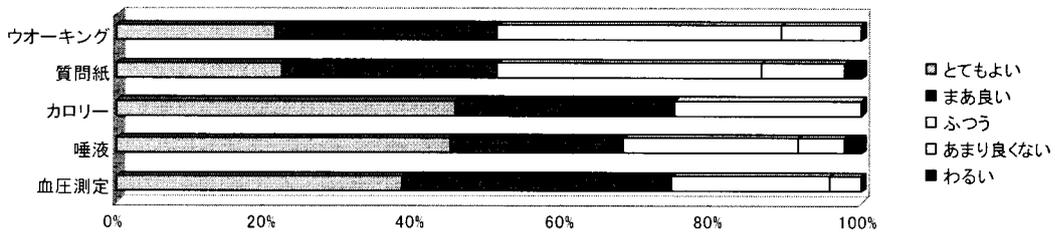
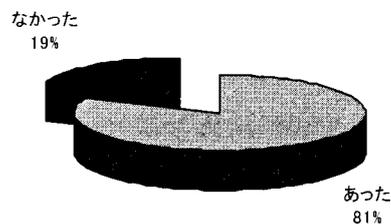


図6. 「癒された」実感



## 4. 認知症地域支援体制構築推進事業への支援

担当者：伊藤薫、山路由実子、船越明子、鈴木敦子、松田陽子

学外協力者：佐甲隆（三重県伊賀保健所長、前三重県立看護大学教授）

### 【事業要旨】

2005年に40.1万人であった三重県の高齢者数は2035年には50.5万人に増加し、高齢化率も21.5%から33.2%へと上昇することが予想される。介護や医療を必要とする状態となっても、住み慣れた自宅や地域に安心して暮らし続けることができるよう、地域の保健・医療・福祉サービスやさらにはボランティア活動等が有機的に結びつき、切れ間なく提供できるような地域支援体制整備に向けた支援活動を行うことが求められる。三重県では、平成19年度から、「認知症地域支援体制構築等推進事業」として、県庁に推進会議を設置し、県内にモデル地区を設定して、先駆的な支援体制を構築し、評価・分析を行い、各地域への普及への取り組みを開始している。本事業は認知症地域支援対策事業のモデル地区である名張市の先駆的な試みへの支援を行い、続いて県内各地域への普及へと繋がるよう県内市町への支援活動を行い、三重県内の認知症地域支援ネットワーク整備への一助となることを目指す。

### 【地域貢献のポイント】

名張市での認知症地域支援体制構築推進事業を中核とし、三重県全体への地域ケアを目標に、住み慣れた自宅や地域に安心して暮らし続けることができるよう、その地域ケア整備体制として介護サービス事業者への支援・認知症理解のための教材開発への協力等が地域貢献活動となると考えられる。

### I. 活動目的

介護や医療を必要とする状態となっても、住み慣れた自宅や地域に安心して暮らし続けることができるよう、地域の保健・医療・福祉サービスやさらにはボランティア活動等が有機的に結びつき、切れ間なく提供できるような地域支援体制整備に向けた支援活動を行うことを本事業の目的とする。

### II. 活動内容

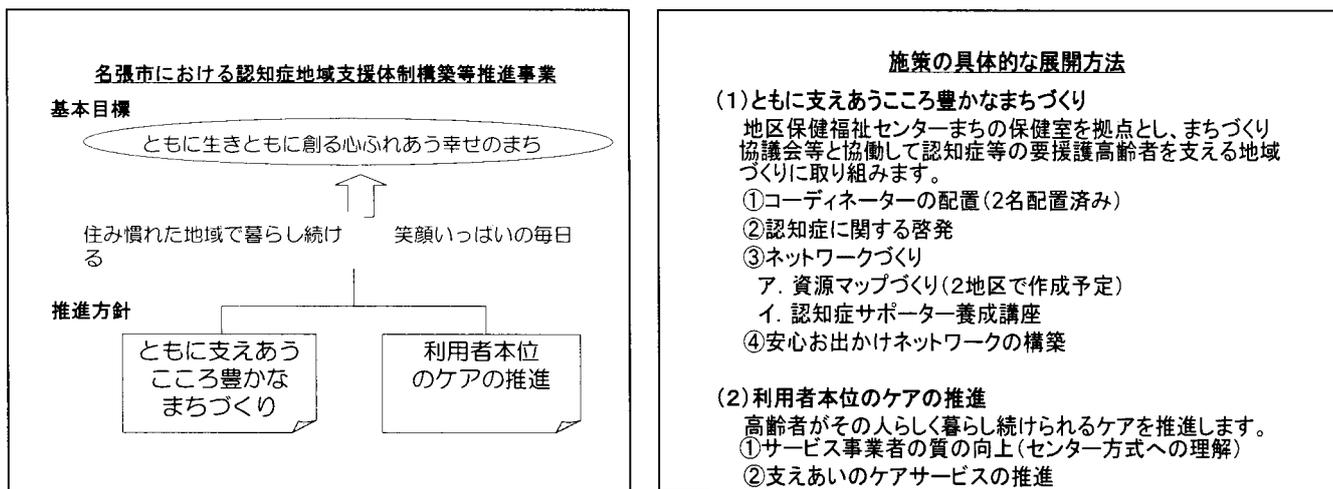
1. 名張市認知症地域支援体制構築事業を推進するための支援活動を行う。
  - 1) 名張市認知症地域ケア資源マップの作成への支援
  - 2) 認知症に対する啓発活動支援
    - (1) 一般市民・ボランティアへの認知症に関する啓発講座の開催支援
    - (2) 児童から学べる認知症に関する理解への動機づけのための教材の開発
2. 三重県・県内市町の要請に応じて、認知症啓発事業へ協力支援活動を行う。

### Ⅲ. 活動の成果

#### 1. 名張市認知症地域支援体制構築事業に対する支援

##### 1) 名張市地域資源マップ作成への活動

##### (1) 名張市における認知症地域支援体制構築事業概念



##### (2) 名張市における認知症地域資源マップ作成のための支援経過

年月	事業推進経過	具体的な支援内容や結果
平成20年3月	市民全体への啓発活動	認知症サポーター養成講座 参加者：民生委員等 120名 講師協力：伊藤薫
平成20年5月	事業推進スタッフへの教育	健康まちづくり講演会 「みんなが主役！ヘルスプロモーション」 参加者：健康づくり隊、介護保険事業所、まちの保健室等 60名 講師協力：佐甲隆
平成20年9月	<p>農山村と住宅団地の2地区をモデル地区に選定</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>アプローチ方法の検討</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>選定地区の住民の参画が困難</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>地区役員代表等との協議の結果、地区役員への啓発後、地域住民へと段階を追って、理解を広めていくことを協議し、認知症啓発事業を計画</p>	<p>地域を探索し、アプローチ方法について検討し、助言。</p> <p>地域代表等との会議に出席。認知症啓発事業実施にあたって、啓発劇制作に協力。</p>

## 2) 認知症に関する啓発講座（以下認知症サポーター養成講座と示す）への支援内容

### (1) 認知症啓発講座開催日・対象・参加者数

開催日	対象者	参加者数
平成20年10月22日（水）	すずらん台地区社会福祉協議会	24人
平成20年11月9日（日）	すずらん台自治会	18人
平成21年2月22日（日）	地域ボランティアおよび一般	81人

### (2) 講座内容

①DVD：「認知症100万人キャラバン」

②講義：認知症の中核症状や認知症のケア等  
講師協力：伊藤薫

③寸劇：「認知症の人を地域で見守ろう」

地域包括支援センターやまちの保健室の職員による認知症の方への地域での対応事例を寸劇にて啓発

### (3) 参加者アンケートより一部抜粋

- 認知症の理解がもっと多くの人に行きわたってほしいので、又、多くの人に聞いていただきたい。
- 認知症という言葉は知っていましたが、気にとめておりませんでした。これを機会にもっとよく知りたいと思いました。
- 助け合いの出来る町づくりが必要と感じた。
- 認知症とわかって対応出来る時と、わからなくて対応していくので違いが出てくる。
- 助けを求めることが必要であること。地域で助けあえる様にしていかなければならない。「困った時、困ったと言える」地域にならなければならないと思う。



### 3) 名張市認知症啓発媒体（紙芝居・認知症関係資料の作成への支援）

#### (1) 認知症啓発を目的とする紙芝居教材の作成

名張市の各地で認知症の理解者を増やしていくための一つの教育媒体として紙芝居を作成する。認知症高齢者に出会ったときの対応や地域の拠点など「地域資源」を有効に利用し地域づくりをしていくこと、また、当事者や家族になったときはSOSを出すことの大切さ等を伝える内容とする。

#### (2) 認知症啓発に資する「認知症ライブラリー」の作成

絵本、マンガ、認知症本人の手記、介護体験紀、医学的解説本、ケア方法の支援、ケアツール（センター方式等）の紹介、DVDのカテゴリーに添って、本やDVDを紹介するパンフレットを作成した。なお、絵本の選書や紹介文の作成にあたっては、本学学生の協力も得た。

## 2. 三重県・県内市町認知症啓発事業への支援

三重県・県内市町の要請に応じて認知症サポーター養成講座の講師として協力し、合計名（予定含む）の参加を得た。対象自治体と参加者数を下記の表に示す。

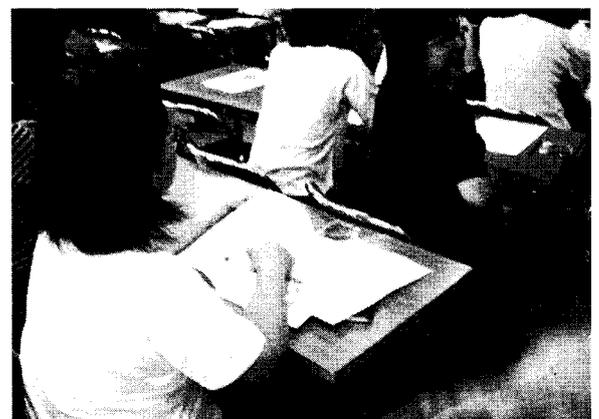
開催者	対象者	回数	参加者数
三重県	自治体職員・包括支援センター職員	1	114人
四日市市	ボランティア・婦人会	1	64人
川越町	老人会リーダー研修	1	100人
菰野町	事業者・郵便局・消防・警察・住民	4	101人
名張市	自治会・社会福祉協議会・民生委員・一般等	4	243人
松阪市	65歳以上の高齢者	5	310人
多気町	民生委員	1	44人
御浜町	行政職員	2	34人
紀宝町	一般	1	101人
	合計	20	1,111人

### (1) 認知症サポーター養成講座の内容

認知症の定義、認知症の中核症状、認知症の経過、サポーターの役割、地域での見守り等を講義した。

### (2) 参加者アンケートより一部抜粋

- ▶ 大変勉強になった。結婚生活50年。夫も78歳。同じことを何度も何度も説明しないと納得できない時がたまにあり。そろそろかしら？と最近気を付けています。自分も必ずやって来ることです。助け合い頑張りたいと思います。
- ▶ 認知症について曖昧だったことが、接し方・家族の過ごし方など大変分かりました。自分もいつか夫もいつかと心配な毎日ですが、少し気楽になりました。
- ▶ 認知症の人に対する受け応えについて、新しい発見、今後のサポートに活かしたい。



## IV. 今後の課題

名張市認知症地域支援体制構築推進事業は、紙芝居等の教材の開発を活かし、地域拠点であるまちの保健室職員が地域において少人数単位での講座を開催できるよう必要時支援を行っていく必要があると考える。また、三重県内認知症啓発事業への支援については、名張市での支援経験や各地で講座開催し得た情報を活かして、県や市町の要請に応じて、情報提供や協力を行っていく必要があると考える。

## 5. 外国人の保健医療サポートシステム開発事業

担当者：橋本秀実、村嶋正幸、佐々木由香、山路由実子、伊藤薫

### 【事業要旨】

平成19年末における三重県の登録外国人数は51,638人(前年比4.7%増)と過去最高を更新している。県内総人口に占める外国人の比率は2.7%、全国第3位となり、県の地域保健を考える上で外国人に対する保健医療はいまや無視できない問題を抱えている。平成19年度は地域交流研究センター課題研究事業として「三重県における外国人医療の実態調査と支援ネットワークの構築」をテーマに三重県内の医療機関ならびに保健師を対象として実態調査を行った。その結果、県内各地域で外国人の保健医療サービスの需要があり、求められる内容に地域差はあるものの保健活動の充実に向けてさらなる対応が求められている実態が明らかになった。そこで、本年度は将来的に外国人の保健医療サポートシステムを開発することを視野に入れ、保健師を中心にした実態調査の詳細な検討を加えることにより、保健師の立場から見た地域における外国人保健サービスの実態と問題を明らかにすることを目的とした研究を行った。

### 【地域貢献のポイント】

外国人へ保健サービスを提供する側の問題点を明らかにし、そのサポートシステムを開発することで、現場で日々さまざまな問題に直面している保健師活動の質の向上、保健師のストレスの軽減を図ることができると考えられる。

また、三重県内で増加の一途をたどる外国人に対する保健医療の実態を把握し、サポートシステムの開発に着手することにより、将来的に三重県内の外国人が適切な保健医療サービスの提供を受けられるようになることが期待され、地域の健康増進に貢献することができると考えられる。

### I. 活動目的・目標

平成19年度実施調査「三重県保健師の地域在住外国人への保健活動についての実態調査」の質的・量的な分析、検討を加え、保健師の立場から見た地域における外国人保健サービスの実態と問題を明らかにする。また、実態調査から明らかになった問題に焦点を絞り、地域で働く保健師からの聞き取りを行うことにより、サポートシステムの構築に向けて保健師サイドからのニーズを明らかにする。

### II. 活動内容および経過

1. 平成19年度実施調査「三重県保健師の地域在住外国人への保健活動についての実態調査」の質的・量的な分析、検討をすすめた。
2. 地域で働く保健師からの聞き取り調査を実施している。

### Ⅲ. 活動の成果

#### 1. 平成19年度実施調査「三重県保健師の地域在住外国人への保健活動についての実態調査」の質的・量的な分析、検討

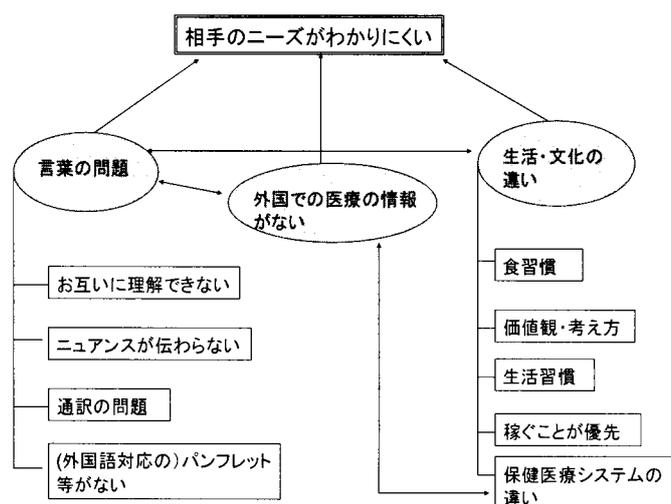
##### 1) 調査結果の量的な分析、検討および結果の発表

昨年度の調査分析後に回収された結果を含めた分析、検討を行い、第 67 回公衆衛生学会（平成 20 年 10 月、福岡）においてその結果を発表した。

##### 2) 質的分析と検討

昨年度の調査（有効回答 278）の自由回答部分について分析した。回答部分を意味のある文あるいは文節で区切り、同じような内容のものを集めて、カテゴリーに分け、さらにコアカテゴリーを抽出した。カテゴリー化は二人以上の共同研究者で行い、結果は共同研究者全員で分析した。以下の文中では、カテゴリーは<>、コアカテゴリーは【】で表す。

(1) 保健活動を行う中で、外国人とのコミュニケーションで困難だったこと  
保健活動を行う中で、外国人とのコミュニケーションで困難だったことを自由に記述してもらった回答では、<言葉の問題>、<生活・文化の違い>、<外国での医療の情報がない>こ



とから【相手のニーズがわかりにくいこと】があげられた（図 1、表 1）。

図 1 外国人とのコミュニケーションで困難なこと

表 1 保健活動を行う中で、外国人とのコミュニケーションで困難だったこと

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
相手のニーズがわかりにくい	言葉の問題	お互いに理解できない
		ニュアンスが伝わらない
		通訳の問題
		パンフレット等がない
	生活・文化の違い	食習慣
		生活習慣
		価値観・考え方の違い
		稼ぐことが優先
		保健医療システムの違い
	外国での医療の情報がない	外国での医療の情報がない

(2) 外国人への保健活動で困ったこと

外国人への保健活動で具体的に困った内容に関しては、<文化・習慣の違い>、<言葉の問題>、<外国人に関する情報不足>、<医療に関する情報の不足>、<外国人登録の問題>、<経済的問題>から、【管理・指導が困難】であることがあげられた（図2、表2）。

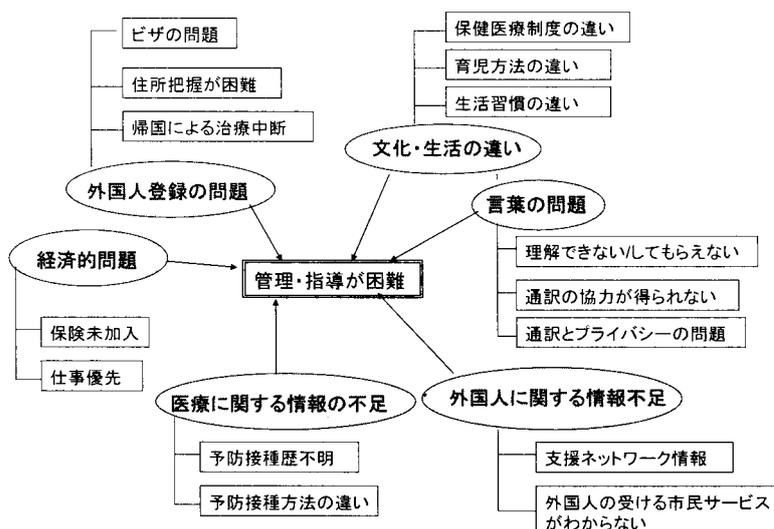


図2 外国人への保健活動で困ったこと

表2 外国人への保健活動で困ったこと

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
管理・指導が困難	文化・生活の違い	保健医療制度の違い
		育児方法の違い
		生活習慣の違い
	言葉の問題	理解できない/してもらえない
		通訳の協力が得られない
		通訳とプライバシーの問題
	外国人に関する情報不足	支援ネットワーク情報
		外国人の受ける市民サービスがわからない
	医療に関する情報の不足	予防接種歴不明
		予防接種方法の違い
	外国人登録等の問題	ビザ・住民登録の問題
		住所把握が困難
		帰国による治療中断
	経済的問題	保険未加入
仕事優先		

(3) 外国人への保健活動で所属する地域において有効な対応

外国人への保健活動に関して所属する地域で有効な対応については、<体制の整備>、<人材の育成>、<情報の整備>、<地域での交流>などを行い、【地域の理解】を得ることがあげられた（図3、表3）。

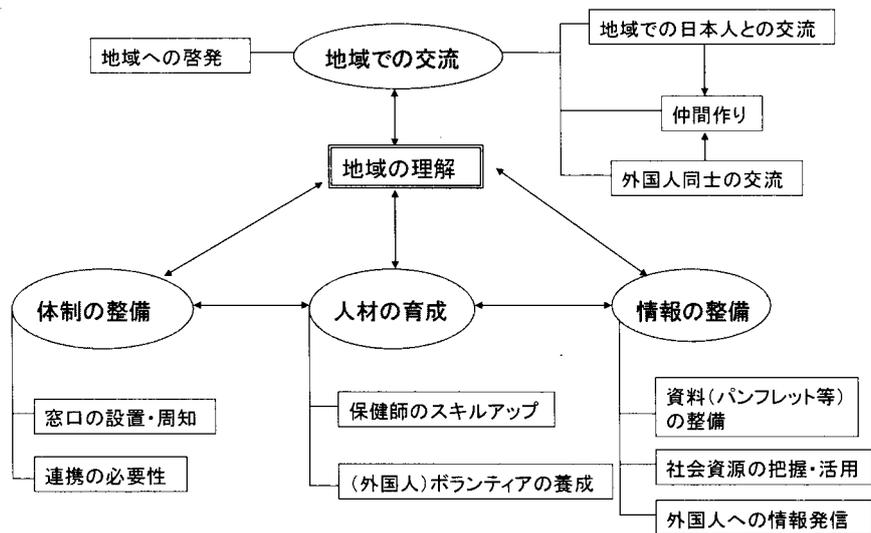


図3 外国人への保健活動で有効な対応

表3 外国人への保健活動で所属する地域において有効な対応

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
地域の理解	体制の整備	窓口の設置・周知
		連携の必要性
	人材の育成	保健師のスキルアップ
		(外国人)ボランティアの養成
	情報の整備	資料(パンフレット等)の整備
		社会資源の把握・活用
		外国人への情報発信
	地域での交流	地域での日本人との交流
		仲間作り
		外国人同士の交流
		地域への啓発

## 2. 保健師の聞き取り調査

昨年度の実態調査から明らかになった外国人への保健活動の問題点について、保健師のニーズを明らかにするため、聞き取り調査を実施しているところである。

## IV. 今後の課題

現在実施している保健師への聞き取り調査の結果を分析して保健師が外国人への保健活動を行うにあたって必要としていることを明らかにし、サポート体制を考えていく必要がある。

## 6. 三重いでんネットワーク支援事業

担当者：二村良子、竹本三重子

学外協力者：中谷 中（三重大学医学部附属病院）、佐藤里絵（三重県立総合医療センター）、  
福島千恵子（三重大学医学部附属病院）、望木郁代（三重中京大学短期大学部）、  
松尾百華（三重大学医学部附属病院）

### 【事業要旨】

三重県内の遺伝医療に携わる医師、看護師、心理士等が集まり、立ち上げられた「三重いでんネットワーク」が行う、三重県内の遺伝医療・遺伝看護の推進・発展のための活動を支援する。

### 【地域貢献のポイント】

- 1) 三重県内の医療職者を対象に遺伝に関する知識の普及・啓発に寄与。
- 2) 遺伝カウンセリングに携わり、三重県内の遺伝医療サービスの質的向上を図る。

### I. 活動目的・目標

三重県内の遺伝医療・遺伝看護の推進・発展のために、「三重いでんネットワーク」が行う活動を支援することを目的とする。

1. 遺伝医療に関する情報交換、相互理解のための交流推進活動を行う。  
遺伝看護検討会の開催・運営の支援
2. 遺伝医療に関する能力向上・啓発・広報に関する活動を行う。  
三重県内各施設に出向いての公開学習会の開催
3. 遺伝医療サービスの質的向上を図る。  
遺伝カウンセリングを実践し、相談活動時の支援。

### II. 活動内容および経過

ヒトゲノム解読作業が完了し、その成果をもとに新たな遺伝医療が展開され、遺伝医療の専門化・複雑化が進んでいる。しかし、遺伝医療においては倫理的に解決の難しい問題に直面することがあるため、さまざまな情報提供のもとに意思決定が行われる体制が必要とされている。そのため、さまざまな職種によるチームでの関わりが重要になってきている。三重県においても遺伝カウンセリング外来が開設されたことを受けて、臨床遺伝専門医、看護職者、臨床心理士、臨床検査技師などがチームを組み、遺伝カウンセリングを行っている。これらのチームにおいて遺伝医療に関する情報交換や看護職者の能力向上の機会や三重県内における遺伝医療・遺伝看護の普及・啓発活動が必須であるとの認識から、「三重いでんネットワーク」を立ち上げ、さまざまな活動を展開している。本事業は、「三重いでんネットワーク」の活動を支援することであり、以下に活動内

容を示す。

1. 遺伝医療に関する情報交換、相互理解のための交流推進活動を行う。

1) 遺伝看護検討会の開催・運営の支援

遺伝看護検討会とは、遺伝医療に関する情報交換や遺伝医療に関わるチームメンバーの能力向上をめざして毎月1回 第3火曜日に本学において、開催している。

本検討会においては、その月に遺伝カウンセリング外来において行われた遺伝カウンセリング事例についての検討や、公開学習会の企画や準備などの運営上の検討や実施後の評価を行っている。

2. 遺伝医療に関する能力向上・啓発・広報に関する活動を行う。

1) 遺伝医療・遺伝看護に関する公開学習会の開催

「三重いでんネットワーク」が主催で、「知っておきたい遺伝の話」として公開学習会を開催している。今年度は、公開学習会を4回開催した（2月現在、2回開催、3月に2回開催予定）。

2) 「三重いでんネットワーク」のホームページの立ち上げ

「三重いでんネットワーク」の取り組みの紹介や公開学習会の案内など広報活動の一環として、「三重いでんネットワーク」のホームページを開設した。

3) 日本遺伝看護学会において、「三重いでんネットワーク」の活動に関する研究について、口頭発表を行う。

三重県における、遺伝医療・遺伝看護の現状と「三重いでんネットワーク」の取り組みについて、日本遺伝看護学会第7回学術大会において、「遺伝カウンセリング実践のためのシステムづくり」というテーマで口頭発表を行った。

3. 遺伝医療サービスの質的向上を図る。

遺伝カウンセリングに看護職者として陪席し、遺伝的問題を抱えた人に対して、単に遺伝子検査を行うということではなく、心理社会的、倫理的な問題を含んでいることから、検査の意味を十分理解できるように、適切な情報を提供し、必要な支援を行った。

### Ⅲ. 活動の成果

1. 遺伝医療に関する情報交換、相互理解のための交流推進活動を行う。

1) 遺伝看護検討会の開催・運営の支援

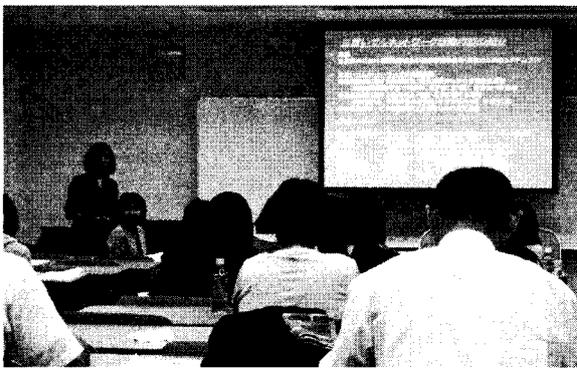
毎月1回 第3火曜日に本学において、遺伝看護検討会を開催している（毎月第3火曜日 18:00~20:00）。1回の遺伝看護検討会において検討事例は、月に2~3例であり、遺伝子検査を受ける前のカウンセリングにおける対応内容についての検討や検査後の結果を伝える場面における対応についての検討を行っている。家族性大腸腺腫症（FAP）や染色体異常の相談が多く、他に、遺伝性難聴や薬剤感受性検査などの相談も行われた。

## 2. 遺伝医療に関する能力向上・啓発・広報に関する活動

### 1) 公開学習会の開催

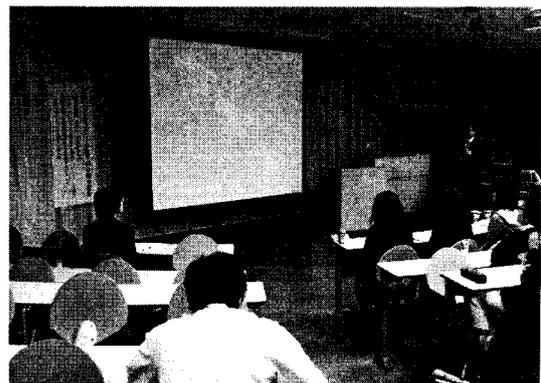
平成 20 年度は計 4 回の開催となり、1 回の参加者は 20 名～30 名程度となっている。これまでの公開学習会終了後に実施するアンケートにより、「身近なテーマで、事例を交えた内容にして欲しい」などの要望を受けて、第 6 回の公開学習会は、「染色体・病気・ケア」ーダウン症候群を中心にーというテーマを設定した。医師の立場から、遺伝専門医が「染色体異常を見かけたら」というテーマで、染色体異常についての基礎知識についての話を行い、助産師の立場からとして、助産師が「染色体異常のお子様をもつご家族へのケア」というテーマとし、染色体異常出生時における家族への関わりについて、これまでの臨床経験からの学びの話であった。さらに、今回は、親の立場からとして、ダウン症児親の会の会長の方にも、子どもが生まれてからの気持ちの変化やどのように子どもにかかわってきたかの実際を話していただく機会を設けた。また、さらに、今回の演者 3 名によるシンポジウム形式も取り入れ、参加者とともに話し合いの時間をとるようにした。

第 6 回公開学習会の参加者は、33 名であり、ダウン症候群を中心にというテーマ設定で行ったため、周産期関係の参加者が多かった。



第 6 回公開学習会（平成 20 年 9 月 13 日開催）

また、第 6 回の公開学習会は、ダウン症候群の親の会の方に講演をいただき、ダウン症候群の親として、その子が出生してから、これまでの子どもへのかかわりや、その時々の母親として、家族としての気持ちの変化、求められる支援などについて具体的に話された。それについて、参加者からのアンケートによると、「自分自身のこれまでの関わりを振り返りながら、これから自分が助産師としてどう関わるべきなのか考えさせられる機会となり、今後の参考にすることができた。」「子どもたちを支えていく必要性を感じた。」「出産後の母親への関わり、支援について勉強になった。」等の意見があった。



今回、当事者の話を直接聞かせていた

第 7 回公開学習会（平成 21 年 1 月 30 日）

多く機会をもつことで、看護職者は、これまでの看護の実践を振り返り、さらに看護の方向性を考える機会となり、有意義であった。今後も、さまざまな疾患の家族会や親の会、当事者と直接接する機会を積極的に設けていくことが必要であるとする。

第7回の公開学習会は、知っておきたい遺伝の話 医師の立場から、「家族性腫瘍：乳がん、大腸がんなど」、看護師の立場から「遺伝看護への身近な取り組みと看護マネジメント」というテーマであった。

## 2) 「三重いでんネットワーク」のホームページの開設

「三重いでんネットワーク」のホームページを開設し、「三重いでんネットワーク」の活動を県内に広報していくことが必要である。

公開学習会の案内や当事者グループや親の会の紹介など連携先について、紹介ができるように今後、ホームページの充実を図っていく必要がある。

## 3) 日本遺伝看護学会において、「三重いでんネットワーク」の活動に関する研究の口頭発表を行う。

三重県の遺伝医療・遺伝看護は全国的にみても後発であるが、「三重いでんネットワーク」として、三重県内の取り組みの紹介として、「遺伝カウンセリング実践のためのシステムづくり」として発表したことに対して、さまざまな職種がチームを組み、活動しているということについて、他施設から関心を示され、ネットワーク設立の経緯や活動状況について質問や意見をいただいた。他施設の取り組みと比較しながら、活動の課題等を明確にしていき、さらなる活動の発展の必要性を感じることで、県内の活動の広報としても重要であったと考える。

## 3. 遺伝医療サービスの質的向上を図る。

遺伝カウンセリングに看護職者として陪席し、遺伝カウンセリングを進めるにあたって、話しやすい場作りと関係づくりに配慮した。また、臨床遺伝専門医と協働し、現病歴や家系図の聴取を行っているが、必要な情報の聞き逃しや、クライアントや家族に対して、必要な情報を丁寧に良いタイミングで伝えられるように、遺伝カウンセリング情報シートの改善などを行った。

## IV. 今後の課題

遺伝カウンセリングの実施や遺伝看護検討会を通して、クライアントや家族への支援を評価し、次の実践にいかし、そこでの知見をもとに、県内医療者等に公開学習会の開催などにより遺伝医療・遺伝看護の普及・啓発が重要であるとする。

公開学習会の開催においては、参加者が増加するために、看護職者の求めている遺伝医療・遺伝看護に関するニーズを把握し、必要なテーマで開催できるように、公開学習会の内容や開催場所などの検討が必要である。

### Ⅲ. 教育・研修開発および 産学官民共同研究

# 1. 研修支援プログラム

## 1) 看護研究の基本ステップ

担当者：斎藤真、山口和世、竹本三重子、小池敦、臼井徳子、野呂千鶴子、伊藤薫  
学外協力者：佐甲隆（伊賀保健所長、前三重県立看護大学教授）

### 【事業要旨】

三重県内で働く看護職者へ看護研究の基本となる講義の実施を通して、看護研究の基礎力を育成し、看護の質の向上に資することを目的とする。

### 【地域貢献のポイント】

三重県内全域の看護職を対象とした看護研究の基礎講座を開催することにより、看護研究への意欲・技術の向上を目指すことが期待できる。また参加者は講座受講後、看護研究発表会への参加を果たすなど継続して看護研究に取り組める意識を高める契機と考えられる。

### I. 活動目的・目標

看護の日常業務の中から研究テーマを見つけ、研究に取り組むための看護研究の基本を身に付ける基礎講座を通して、看護研究への取り組み意欲・技術の向上を図り、ひいては日常業務の質の向上に資する。

### II. 活動内容および経過

平成20年8月～11月まで、月1回（計5回）8講義を行った。詳しい日程および内容は表1参照。

表1 看護研究の基本ステップ日程表

回数	日程	テーマ	担当教員
第1回	8月7日(木)	日頃の疑問を研究に繋げよう！	佐甲隆・伊藤薫
		研究計画の立て方と書き方	臼井徳子
第2回	9月11日(木)	質的研究	竹本三重子
		文献検索について	伊藤薫
第3回	10月10日(金)	英論文の読み方	山口和世
		量的研究	小池敦
第4回	11月14日(金)	パワーポイントによるプレゼンテーション	野呂千鶴子
		統計は怖くない！ ーエクセルを使って、楽しく統計解析ー	斎藤真

### Ⅲ. 活動の成果

#### 1. 参加希望所属機関等について

三重県内 22 施設（国立病院 3 施設、県立病院 4 施設、市町立病院 5 施設、民間病院 11 施設）から参加希望があり、41 名の参加を決定した。詳細は図 1 参照。



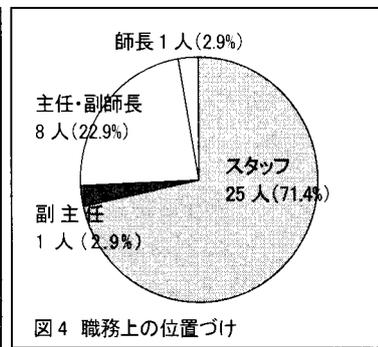
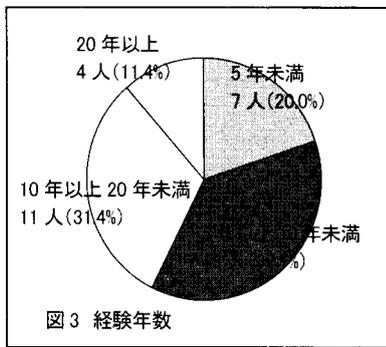
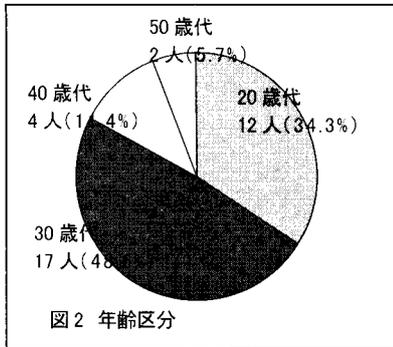
図 1 参加者所属機関一覧

## 2. 参加者アンケート結果について

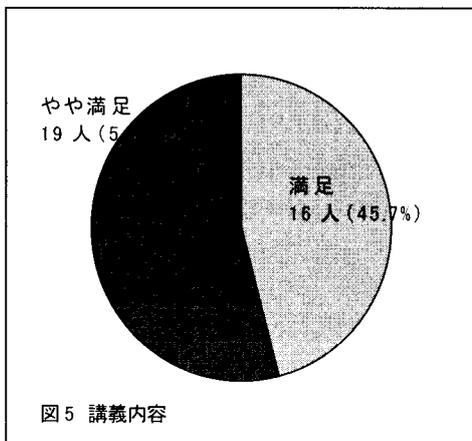
実施後に内容についての満足度を問うアンケート調査を行ったが、おおむね好評であった。アンケートは最終回（11月14日）に参加し、アンケート記入に同意された35名について回答結果を以下にまとめた。

### 1) 参加者の基本属性

参加者の年齢区分を図2、経験年数を図3、職務上の位置づけを図4に示す。



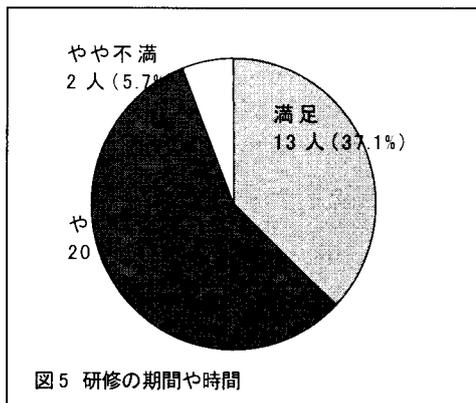
### 2) 講義内容について



#### 【講義内容に関する意見】

- 難しい部分や時間が足りない部分があった。
- 内容が若干難しかった。
- 研究のテーマ探しについてもっと詳しく具体的に聞きたい。
- 色々勉強になることも多く、研究に対する思いが前向きになった。
- とても丁寧に教えて頂けた。
- このような教育を以前受けたがとても難しい内容でつらかった。今回の内容はわかりやすかった。

### 3) 研修の期間や時間について



#### 【研究期間・時間に関する意見】

- 半日でなく、一日でやってほしい。
- 1つの研修が1時間を超えてくると集中力が欠けてしまうので、休憩をとってほしい。
- もう少し早い時期に開催してくれるとありがたい。
- もう少し長い期間でしてほしい。毎月来るのが楽しかった。

#### 5) 本事業についての意見・感想について

- 統計は、今までで一番わかりやすい講義であった。
- 統計のみの講義をしてほしい。
- 統計をもう少し時間をかけて、実践で使えるような内容でしてほしい。
- パソコンを使用したり、グループワークがあったのがよかったと思った。
- 研究計画書に至るまでの研究への取り組み方をどう準備していくかが重要であると感じた。
- 個別に相談できる環境があり、よかった。
- とても親切でよかったです。次回来るのが楽しみです。
- 大学で学ぶチャンスがなかったのもので大学で研修を受けてよかったです。
- とても楽しく気分転換にもなりました。
- 全く研究というものがわからなかったけれど、「さわり」くらいは理解できた気がします。実践する機会があるので、ここで得た知識を活用して意欲の向上に努めたいです。
- 院内では本講座のように詳しくは学べないので、多くの人に本講座を受けてもらいたい。
- 研究発表会は秋ごろに多いので、春に集中して実施してほしい。
- 聞きたい講義だけを聞けるスタイルにしてほしい。

#### 6) 本事業以外についても、地域交流研究センターに期待すること

- 施設内での研修会の講師として来て頂きたい。
- 託児があればよいと思った。
- いろいろな研修を企画していただければ、ぜひまた参加させていただきたいと思った。

### IV. 今後の課題

参加者の参加動機として、「上司に勧められた」「院内の看護研究委員を担当しているため」「研究を後輩に指導するため」等個人の自発的な参加動機よりも組織的に取り組むための必然性から参加されている方が大半であった。本講座も開設から3年目を向かえ、三重県内の施設やその管理者からは、「看護研究の基礎を学ぶ講座」として認知度が高くなってきていると感じられた。また参加者からは、「看護研究を楽しく学べ、毎回受講することを楽しみにしていた」等の声が直接聞くことができ、当初は業務の一環として参加していた方々も看護研究を学ぶ楽しさを感じ、意欲の向上につながったと思われた。

来年度への期待として、看護研究の基礎講座のみでなく、「統計」「量的研究」「質的研究」等分野ごとに深めていく講座の開設を望まれている参加者も多く、また過去に参加された受講者から「看護研究基礎講座の次のステップとなる講座を検討してほしい」等の意見も寄せられている。よって、来年度の課題として、看護研究の基本講座の継続実施とともに、新たに「看護研究の手法を詳しく学べる講座」を追加実施していくことを検討していく必要があると考える。

## V. 看護研究の基本ステップの講義内容を発展させる試みとして遠隔授業の実施

看護研究の基本ステップの講義内容を三重県内南部医療機関2箇所（県立志摩病院、紀南病院）と連携し、遠隔授業を試行したので、以下に報告する。但し、本プロジェクトは、独立行政法人化に向けた学長特別プロジェクトとして試行した。

### 1. 遠隔授業実施内容

回数	日程	テーマ	担当教員
第1回	10月3日(金)	研究計画の立て方と文献検索について	伊藤薫
第2回	10月17日(金)	量的研究	小池敦
第3回	11月7日(金)	質的研究	竹本三重子
第4回	11月21日(金)	エクセルを使って楽しく統計解析	斎藤真
第5回	12月5日(金)	パワーポイントによるプレゼンテーション	佐々木由香

### 2. 実施場所

本学大学院棟3階で担当教員による講義を行い、県立志摩病院と紀南病院へテレビ会議システムにより配信した。なお、紀南病院実施時には、尾鷲総合病院スタッフも参加した。

### 3. 参加者数

回数	日程	志摩病院	尾鷲総合病院	紀南病院
第1回	10月3日(金)	14名	11名	47名
第2回	10月17日(金)	16名	9名	34名
第3回	11月7日(金)	18名	10名	28名
第4回	11月21日(金)	22名	11名	17名
第5回	12月5日(金)	17名	8名	27名
合計		87名	49名	153名

### 3. 参加者アンケート結果

実施後に内容について、アンケート記入に同意された方35名について回答結果をまとめた。講義内容については、満足37.1%（13名）、やや満足60.0%（21名）、やや不満2.9%（1名）であった。今後も遠隔授業に参加希望については、参加したい40.0%（14名）、できるだけ参加したい57.1%（20名）、あまり参加したくない2.9%（1名）であった。以下、遠隔授業に関する意見や感想等についての自由記載事項を一部抜粋した。

- 直接意見交換が出来てわかりやすかった。
- 実際に大学に行かなくても授業が受けられることがとてもありがたかった。
- 慣れないので少し違和感はあったが勉強になった。
- 受講時疑問に思った事をその場で質問でき答えて頂けるメリットと長時間かけていなくてもすむメリット（安全性、経費、多数の人数参加等）を実感した。
- 統計学など研究に必要なテーマをもっと詳しく講義してほしい。
- 医療事故や感染等に関する講義も行ってほしい。
- 感染や緩和ケアについて学びたい。

### 4. 今後の課題

本学と地域機関との積極的な交流を行うテレビ会議システムを看護研究の基本ステップのみでなく、他の事業にも活かし、センター事業を発展させていきたい。



## 2) 夢が丘県民講座

### ～ケアする人のセルフケアセミナー～

担当者：伊藤薫、日比野直子、灘波浩子

#### 【事業要旨】

近年、ケアする人のケアについて注目され、その重要性があげられている。しかし、三重県においてはケアする人のセルフケアについてまだ十分に認識されていない現状がある。そこで本事業では様々な場面で、ケアに携わっている人（看護職、ケアマネジャー、ヘルパー、介護福祉士、家族介護者等）の計 30 名を対象として、講演、演習、ワークショップなどを通して、ケアする人自身がケアされることの重要性について体験的に学ぶ機会を提供した。

#### 【地域貢献のポイント】

ケアする家族や看護師・介護士等専門職のうつ病やバーンアウトが問題になっている。三重県内においても同様の問題が指摘されている。これに対してケアされる人もケアされなければならないという認識とともに、各自の職場で自らをケアすることの重要性について浸透することが期待される。この事業によって、家族をケアする家族、看護師介護士等、職業としてケアに従事する方々へのストレスやバーンアウト防止への一助となり、ケア環境およびケアする人の健康の重要性を考える契機を提供できたと考える。

#### I. 活動目的

ケアする人のセルフケアについて十分浸透していない三重県内において、ケアする人自身がケアされなければならないという考えを県内に浸透させていくことを目的とする。

#### II. 活動内容および経過

平成 20 年 10 月～12 月まで、月 1 回（計 3 回）6 講義を行った（表 1）。

表 1 セミナーの概要

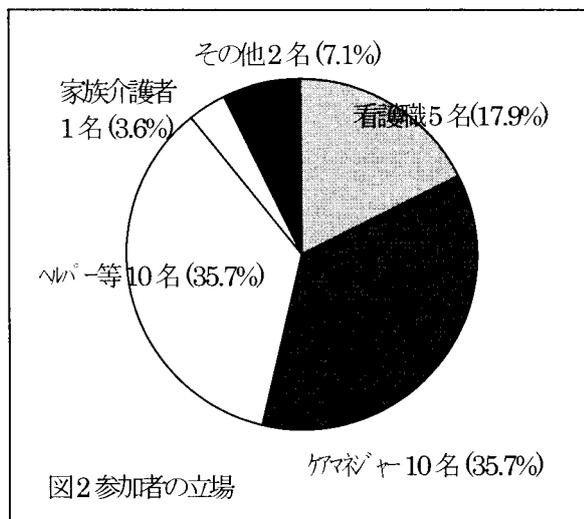
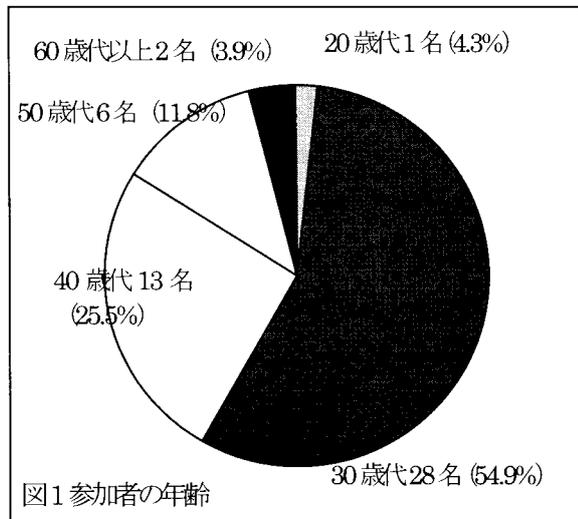
開催日	研修内容	講師
10 月 8 日 (水)	インフォメーションおよびワークショップ 「ケアする人」の出会い	三重県立看護大学 伊藤薫
	ワークショップ 「歌と音を楽しみ、豊かな時間を」	音楽療法士 伊沢径世氏
11 月 19 日 (水)	講演および演習 「自己への気づきを体験しよう！」	保健師・交流分析士 山口節子氏
	ワークショップ 「歌と音を楽しみ、豊かな時間を」	音楽療法士 伊沢径世氏
12 月 17 日 (水)	講演および演習 「よりよい対人関係を築くために」	保健師・交流分析士 山口節子氏
	講演および演習 タッピング・タッチ ～ふれあい、ケアしあう方法を学ぶ～	ホリスティック心理教育研究所 中川一郎氏

### Ⅲ. 活動の成果

参加者に対して本セミナー終了時に、セミナーについての感想を求めた。30名中28名から回答を得られた。以下に概要を示す。

#### 1. 回収率・参加者の属性（年齢・立場）

参加者の年齢および立場を図1、図2に示す。



#### 2. 講座内容に対する満足度について

講座内容に関しては、音楽療法士によるワークショップやタッピングタッチの講義や演習は、全員から「満足」との回答を得た。その他の講義についても、約80%の方から「満足」との回答を得た。

#### 3. 自由記載から一部抜粋

- 現在、さまざまなストレスを感じており、この時間だけでも癒された感じでよかったです。
- 良いケアを提供するためには、まず「自ら」ということがよくわかりました。
- ケアする側のストレス発散になりました。マッサージはすごく役に立つと思います。同じ職員同士でやりたいです。

### Ⅳ. 本事業に対する評価と今後の課題

今回の参加者は30代、40代が多く、仕事や家庭でも様々な課題やストレスを抱えて参加していた。多忙のためセミナー開始時間に遅れる方も多く、3回連続で参加できた方は約60%であった。昨年度の実施結果から、今回のセミナーは3回シリーズで企画した。その理由は、ストレスを抱えた対象者が、この3回を通して、セルフケアの必要性を感じ、方法を体験することで、さらに職場や家庭においてセルフケアについての啓発活動につなげていくことが望ましいと考えたからである。しかし、ケアの現場に立っている参加者にとっては、3回を通しての参加が困難であると思われた。

ケアに携わる職種の離職は社会的にも問題になっており、ケアする人のケアの必要性は高く、職場や地域へ出前講座として行ってほしいとの要請が県内3箇所からあった。本セミナーの主旨であるケアする人のケアの重要性は、認識されつつあると考えられる。今後の課題として、セミナーの出前講座等のスタイルの変更も課題と考える。

## 2. 研究支援プログラム

### 1) 特定地域研究支援：山田赤十字病院

担当者：永見桂子

#### 【事業要旨】

本事業は、地域交流研究センターの組織変更に伴い、平成 18 年度より研究支援プログラム特定地域研究支援として継続されたものであり、今年度で 3 年目となる。

山田赤十字病院看護部では、研修推進チーム会が中心となって、院内看護職の研修・研究活動支援に取り組んでおり、研修推進チーム会との連携のもとに、実践現場でのニーズにそった研修・研究活動の支援方法を検討してきた。本事業を通じて、短期的な研究に留まらず、研究課題をさらに深め、継続的な研究活動へと発展していく取り組みもみられ、研究活動の活性化において一定の役割を果たせたものとする。

#### 【地域貢献のポイント】

山田赤十字病院での研修・研究活動支援を通じて、看護職の研究への意欲を高め、研究遂行能力の強化を図る。看護研究活動から得られた成果を看護実践に還元することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与することができる。

#### I. 活動目的・目標

研究支援プログラムの特定地域研究支援の一環として、山田赤十字病院での研修・研究活動を支援する。

1. 研修推進チーム会の研修会企画・運営への協力支援を通じ連携を強化する。
2. 院内看護研究グループをサポートする看護研究推進チーム員への助言・協力を通じ実践現場でのニーズに沿った研究活動支援を図る。

#### II. 活動内容および経過

##### 1. 看護研究研修会への協力・支援

看護研究小委員会企画の看護研究Ⅱ・②（2年目以降の看護師対象、キャリアラダーⅡの申請に必要な研修、平成 20 年 6 月 13 日）の講師を担当し、1) 日頃の疑問や課題を研究テーマに絞り込むプロセスを理解する、2) テーマを絞り込む過程における文献検討の必要性と方法を理解する、の 2 点をねらいとし、講義を行った。院内看護職 28 名が参加し、23 名（82%）から「研究テーマの絞り込み方について理解できた・やや理解できた」、21 名（75%）から「今回の研修で得た知識は、今後の研究活動に活かすことができそう・ややできそう」、22 名（79%）から「今回の研修内容は満足できた・やや満足できた」との回答を得た。「研究の基本的なことわかりやすかった」

が「事例があるともっと分かりやすいと思う」などの感想があり、実際の研究事例を素材として具体的なプロセスを示す、ディスカッションを取り入れるなどの工夫が必要であった。

## 2. 院内看護研究発表会への協力・支援

看護部看護研究小委員会企画の第62回院内看護研究発表会（1日目：平成21年2月20日、2日目：3月2日）の講評を行う予定である。「医療依存度の高い患児の退院支援の評価」「抗がん剤の取り扱いについての実態調査－曝露に関する認識と防護具の利用の現状－」「末期癌の通院維持透析患者ケアの困難さ」など学会発表で研究成果を公表している発表者および看護研究グループがあり、看護の質向上を目指した精力的な取り組みがうかがわれる。

## 3. 研究活動支援

院内看護研究グループの研究活動をサポートする看護研究推進チーム員への助言・支援を行うとともに、「消化器術後患者の在宅支援」に関する事例研究について、看護研究推進チーム員を交えた研究相談会（平成20年10月7日）にて助言を行った。

# III. 活動の成果

昨年度までは、院内看護研究発表会での成果発表に至るまでの過程で、進行や内容の深まりに差異が生じており、看護研究推進チーム員への研究指導のスーパーバイズや、適宜、研究グループメンバーへの直接指導を行ってほしいとの要請があったが、今年度は直接的な研究相談は1回に留まり、看護研究推進チーム員の努力と力量に負うものが大きいと考えられた。

今後、院内看護研究発表会での講評および看護研究推進チーム員とのディスカッションを通じ、活動の評価を行う予定である。院内看護研究発表会で発表予定の演題（抄録）は、研究目的および背景の明確化、研究方法の妥当性、目的・結果・考察の一貫性などの課題は見受けられるものの、いずれも実践現場ならではの事実や発見に基づいており、看護研究推進チーム員の活動の成果が反映されたものと言える。山田赤十字病院の看護職の看護研究に取り組む意識は高く、看護実践における研究成果の活用につながっていくものと考えられる。

# IV. 今後の課題

今年度で研究支援プログラム特定地域研究支援としての3年間の活動を終了する予定であり、年度内に看護研究推進チーム員とのディスカッションを通じて活動の最終評価を行うこととしている。当初の看護研究グループへの直接指導から、看護研究推進チーム員への助言・協力を通じた研究活動支援に重点を置いた活動へと変容してきたが、特定地域研究支援という本プログラムの趣旨を鑑み、南勢志摩地域の基幹病院である山田赤十字病院の特性を踏まえた活動内容・方法となっていたか考察することが課題である。

## (2) 特定地域研究支援：紀南病院

担当者：玉田章、平野真紀

### 【事業要旨】

看護研究に関する研修会の多くは津市や四日市など三重県中部で開催されることが多い。紀南地域は三重県南部に位置するため、それら研修会へ参加するためには長距離を移動しなければならない。本事業は、この地域性を憂慮し、平成 17 年度から継続して行っている紀南地域の基幹病院である紀南病院の看護職を対象とした研究支援である。紀南病院で実施される看護研究活動について指導・支援をすることを通して、同施設の看護職の研究遂行能力を育成し、紀南地域住民に対する看護サービスの質的向上をねらいとしている。

### 【地域貢献のポイント】

看護職が、日常の看護援助での問題を研究課題として研究することは看護専門職業人としての意識を高める契機となる。また、研究を継続して行うことは看護の質の向上として地域の人々に還元される。したがって、本事業により、紀南病院看護職の研究意欲を高めるとともに研究遂行能力や研究的思考が養われることによって、紀南地域の人々によりよい看護が提供されるものと考えられる。

### I. 活動目的・目標

看護専門職業人として、臨地での看護の質向上のために看護研究を行うことは重要である。しかし、看護師養成課程には様々なコースがあり、看護研究については全ての看護師に対して必ずしも十分な教育がされているとは限らない。したがって、本事業により紀南病院における看護研究活動の支援を行い、同施設看護職の研究遂行能力を育成することを目的とする。

### II. 活動内容および経過

平成 20 年度の活動は、これまでの活動を継続し、研究指導、看護研究発表会講評等を通して、紀南病院での看護研究活動を支援した。

#### 1. 研究計画書の指導

実施日：平成 20 年 9 月 27 日、10 月 7 日

平成 21 年度に発表を予定している研究計画についての指導を実施した。今年度は遠隔授業システムを使用し、4 病棟 4 題の研究計画に対して指導を行った。

#### 2. 院内研究発表会抄録の指導

実施日：平成 20 年 10～12 月

平成 20 年度の紀南病院看護研究発表会で発表する研究抄録について、紀南病院看

護部教育委員（研究部門）の事前指導をふまえ、Eメールによる指導を実施した。9病棟を対象に9題の研究課題の抄録について指導を行った。

### 3. 看護研究発表会講評

実施日：平成20年12月14日

平成20年度の紀南病院看護研究発表会に出席し、各病棟の看護研究発表に対して講評を行った。

## Ⅲ. 活動の成果

本事業は平成17年度に地域交流研究センターの県民局担当制事業のうち県民局活動として開始した。地域交流研究センターの組織変更に伴って平成18年度から「研究支援プログラム」として計画し、計4年に渡って実施している。この結果として、紀南病院内で自治的に研究支援が行えるようになり、院外への研究発表数も増加している。今年度は、院外の学会等で6題の発表を行っている。

表 平成20年度 紀南病院院外研究発表

発表学会等	題目数
三重県看護協会研究発表会	3
三重県地域医療研究発表会	1
東海北陸地区看護研究学会	1
全国国保地域医療学会	1

## Ⅳ. 今後の課題

本事業による研究支援により、紀南病院看護部の研究活動は活発となったが、看護系の研究者による指導や助言は現在も必要な状況である。したがって、紀南病院内で研究指導ができる看護職員を育成し、研究の質を向上させることが今後の課題である。

### 3. 産学官民共同研究事業

担当者：斎藤真、村本淳子

#### I. 研究目的・目標

三重県内の企業、地域産業、官公庁、県民等とともに、それぞれが保有する人材、設備、資金、技術を有効に活用し、共通する技術課題を分担して、健康や福祉に寄与し、三重県内のケアの質を向上させることを目的とする共同研究を行う。

#### II. 研究内容および経過

共同研究の申し出のあったテーマについては、以下のとおりであった。

研究テーマ	研究の概要等	担当教員
① 水圧式駆動システムを用いた安全で人にやさしい沐浴装置の開発	<p>本研究は昨年引き続き2年目である。病院、産院などで新生児を沐浴させる際に用いる沐浴槽は、固定されており、このため、多くの助産師は沐浴作業の際に、沐浴槽の高さに自分の身体を合わせねばならず、中腰姿勢を強いられている。その結果、沐浴作業時の身体への負担は大きく、ほとんどの助産師が腰痛に悩まされており、作業姿勢に配慮した製品が望まれている。</p> <p>また、生まれたての新生児を対象とした沐浴であるので、清潔さにはいっそうの配慮が求められる。しかし、従来の沐浴槽は固定式であるため、限られた範囲でしか洗浄が行えず、そのため、排水溝などで雑菌が固着する可能性があり、脱着式などの新たな機構を有する製品が望まれている。そこで本学の研究グループにより、沐浴時の作業姿勢を人間工学的に評価・解析し、身体的な負担が少ない沐浴槽高さの設計値を明らかにしている。さらに、身体寸法にあわせて高さ調整をすることで、生体への負担が少ないことも明らかにし、これらの研究成果をもとに、企業の技術シーズである「水圧式駆動システム」を応用することで、安全で使いやすい沐浴槽の開発を行う。今年度は製品化への最終段階としてユーザビリティや安全性についての検討も含めた総合的な研究を行った。</p>	斎藤真 村本淳子

## IV. 資料

# 1. 情報発信

## 1) 活動報告

- (1) 地域交流研究センター年報 VOL.10 発行
- (2) 平成 20 年度地域交流研究センターパンフレット

## 2) 学会発表

- (1) 演題：卒業生サポートネットワーク構築と危機管理時の社会貢献に関する研究  
(第 2 報)

発表者：中北裕子、日比野直子、松田陽子、野呂千鶴子

発表場所：第 61 回三重県公衆衛生学会（伊勢市生涯学習センター）

事業名：夢が丘ハートネットワーク事業

- (2) 演題：三重県保健師の地域在住外国人への保健活動についての実態調査  
(第 1 報)

発表者：橋本秀実、深堀浩樹、伊藤薫、馬場雄二、山路由実子、佐々木由香、  
佐甲隆、村嶋正幸

発表場所：第 67 回公衆衛生学会（平成 20 年 10 月、福岡）

事業名：外国人の保健医療サポートシステム開発事業

## 3) リーディング産業展みえ 2008 でのブース展示

（「みえ産学官研究交流フォーラム」に参加）

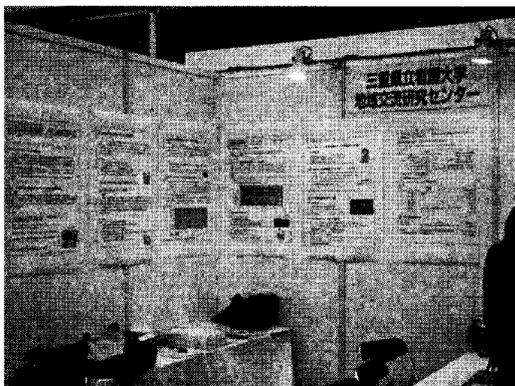
日時：平成 20 年 11 月 9 日（金）～11 月 10 日（土）

場所：四日市ドーム

内容：地域交流センターの事業紹介および健康相談

相談者数：123 名

担当：伊藤薫、本学学生 3 名



## 4) 平成 20 年度研修会講師などの派遣

内容	対象	日時	場所	主催者	担当教員
看護研究発表会	県立病院看護職員	平成 20 年 6 月 28 日(土) 12:30～17:00	県立看護大学	病院事業庁	中村恵 崎山貴代

## 2. 地域交流研究センター事業パンフレット

平成 20 年度

MIE  
PREFECTURAL  
COLLEGE  
of NURSING

# 三重県立看護大学 地域交流研究センター



### 地域に根ざした看護実践支援と研究を 目指す地域交流研究センター

地域交流研究センターは、明るく豊かな少子・高齢社会における「地域づくり」のため、地域特性にあった「地域ケアシステム」の研究開発、ケアに関する情報の収集・提供など、実際に活用しうる看護支援方法を研究開発、その研究成果を保健・医療・福祉機関等に提言・提供することにより、大学の「地域社会への貢献」を目的としています。

## 課題研究事業

三重県における健康ニーズ、しあわせプランなど行政施策と  
関連した課題研究

### 夢が丘ハートネットワーク事業

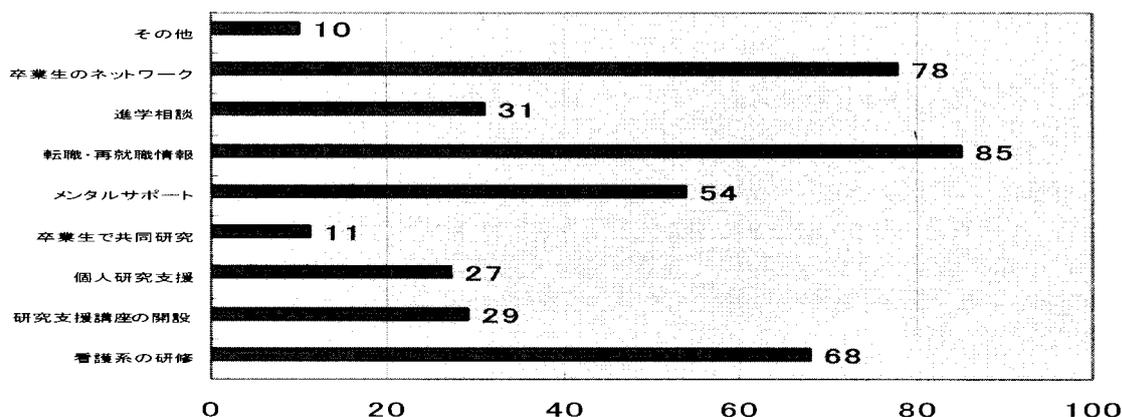
夢が丘ハートネットワーク事業は本学の卒業生の支援事業です。卒業生に対する支援を考え、卒業生支援プログラムを検討し、引いては、災害等健康危機発生時に災害支援を行えるようネットワークの基盤整備を目指しています。

### 卒業生の動向調査結果より一部抜粋

・卒業動向としては、卒業1年では困難なことがいろいろあったが、先輩などに相談し、乗り切り、キャリアアップを目指して転職や進学する者があり、自分の職場を模索しながら日々仕事をしている感触がえられた。大学に卒業支援の内容として多いものが、「転職や再就職の情報」「卒業生のネットワーク」「看護系の研修」「メンタルサポート」であることから、本研究の目的として提示した内容と合致している事が把握できた。

・災害看護や活動に関心は見られている事から大学としてボランティア活動の拠点となるような体制をとり、積極的に働きかけて行けば十分機能する可能性はあると考えられた。

図 卒業支援として大学に希望する内容（複数回答） 単位：名



### 今年度の計画は？

- 1) 夢が丘ハートネット構築
  - ① 卒業生支援プログラムの検討
  - ② 卒業生・看護職対象の研修会開催  
離職予防に向けたメンタルサポート研修会の開催
- 2) 卒業生社会貢献基盤整備(災害等健康危機管理体制整備)
  - ① 災害時に本学が拠点となり、卒業生がボランティア活動等に従事できるような体制づくりを行う
  - ② 災害時看護研修会の開催(資質向上)  
災害時看護研修 予定
- 3) 卒業生支援及び災害看護拠点に関するベンチマーキング



担当教員：野呂千鶴子・日比野直子・中北裕子・松田陽子

地域専門ケア事業

## ヘルスプロモーション支援（新規）

ヘルスプロモーション理論をコアに、地域や行政機関・医療機関等と大学との橋渡しができるよう実践活動を開発支援しようとする取り組みです。



## ヘルスプロモーション支援とは？

ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をコントロールし、改善できるようにするプロセスです。直訳は、「健康増進」ですが、食生活や運動といった個人的な「健康づくり」だけでなく、質の高い生活を目指して、ライフスタイルを自ら積極的に改善し、地域社会と協働していきいきと生活し、参加し、自己実現し、お互いに支援し合い、健康的な環境を整えようとする視点や理念に基づいています。

三重県民の皆様をはじめ、看護・介護や医療に携わる人々が健康に生きていく上でのライフスキルを磨き、元気で生活できる支援的生活や職場環境をつくり、生きがいのある人生を支える活動を支援していこうという取り組みです。

今年度は、本学で4つのプロジェクトが発足いたしました。その取り組みについて具体的に以下に示します。



## 「健康の郷・美杉」ヘルスツーリズム支援事業

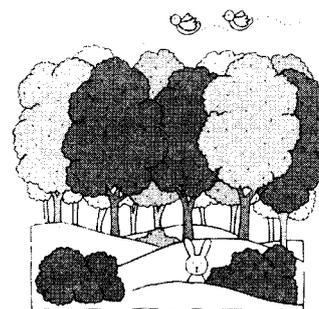
### I. 目的

本校の所在地である津市の南西部に位置する美杉地区は津市全面積の30%を占め、その90% (186.3km<sup>2</sup>)が山林という広大な森林に恵まれている。平成19年度には総務省より「森林セラピー基地」の認定も受け、この広大な自然を活かし、「健康」「癒し」「地域再発見」「人々のつながり」をキーコンセプトとして地域住民、行政、大学、産業が協働しながら、新たな地域資源(人・自然・健康・文化)を創造していくための専門的支援を行う。

### II. 方法

1. 津市が実施する「地域資源を活かしたヘルスツーリズム推進事業」における事業の企画立案・実施・評価に参画
2. 事業への参画においては本学の専門性を取り入れ、「健康づくり」「癒し」のヘルスツーリズムを推進
3. 地域の人々の暮らしや自然を活用した健康プログラムの開発と提供
4. 健康支援ボランティアの人材育成と地域での活動の場の開発

担当教員：山路由実子・佐甲隆・草川好子・平野真紀



## 地域専門ケア事業

地域における実践活動を通して看護方法およびシステム開発に関する実践研究

### 女性のための健康相談および不妊相談の支援

#### 事業内容

- 1) 三重県男女共同参画センターフレんてみえの相談事業への協力
  - ・「三重県立看護大学助産師による女性のための健康相談」  
日時：毎月第1～4木曜日 午後1時～3時
- 2) 「三重県不妊専門相談センター事業」の運営への協力
  - ・不妊相談員への助言、情報提供、学習支援を行い、相談活動を支援



#### 女性のための健康相談や不妊相談センターの活用を！

- 女性のための健康相談は、思春期の相談から出産や育児に関すること、また更年期等について、ご相談をお受けしています。「心配だけれど、なかなか身近な方に相談しづらい。」「どこに相談したらよいかわからない」などお気軽にご相談ください。
- 「三重県不妊専門相談センター」は、相談者の相談ニーズにあわせて、不妊に関する情報提供や医療機関の紹介、生活面の助言などを行っています。私たちはその相談活動が円滑にすすむように支援を行い、間接的に不妊で悩む方々をサポートしています。

担当教員：二村良子・永見桂子・崎山貴代・中山優子・小村明子・田中利枝

### 1型糖尿病をもつ子どもへの支援

#### 事業内容

- 小児糖尿病キャンプ運営企画への支援
- 学生ボランティアによる企画会議の運営支援等
- 医療スタッフ・学生ボランティアの育成への学習会開催
- 主に糖尿病キャンプでのスタッフの役割、インスリン注射



#### 小児糖尿病キャンプ運営の支援内容

- 1) 8月に四日市市で開催される東海地区小児糖尿病サマーキャンプの運営支援  
学生ボランティアが主催する企画は工夫されており、キャンパーやスタッフからも好評を得ている
- 2) 4～8月に学生スタッフへの勉強会の開催  
将来医療従事者になるにあたっての貴重な学習の機会となっている。
- 3) 2ヶ月に1回行なわれるキャンプ実行委員会に出席
- 4) 毎月1回行なわれる学生の企画会  
企画会は学生ボランティア主体に運営され、主に企画についての検討が行われる。企画会では、担当者や病院スタッフからの具体的な助言が得られている。

担当教員：前田貴彦・落合春香



## 認知症地域支援体制構築推進事業への支援

### I. 目的

2005年に40.1万人であった三重県の高齢者数は2035年には50.5万人に増加し、高齢化率も21.5%から33.2%へと上昇することが予想される。介護や医療を必要とする状態となっても、住み慣れた自宅や地域に安心して暮らし続けることができるよう、地域の保健・医療・福祉サービスやさらにはボランティア活動等が有機的に結びつき、切れ間なく提供できるような地域支援体制整備に向けた支援活動を行うことを本事業の目的とする。

### II. 方法

1. 認知症に対する啓発活動支援(名張市・菰野町)
2. 名張市認知症地域ケア資源マップの作成への支援
3. 名張市認知症ケアサービス事業者事例検討会への支援
4. 認知症実務者・管理者研修会への協力(三重県内全域)
5. 市町・地域包括支援センター新任者研修会への協力(三重県内全域)



担当教員: 伊藤薫・佐甲隆・山路由実子・船越明子・鈴木敦子・松田陽子



## 三重いでんネットワーク事業

### I. 目的

三重県では遺伝医療に対応する施設が少なく、各専門職の役割が明確化されていないことから、クライアントや家族と関わる医療者自身が戸惑いを感じ、十分な治療や看護が適用できていないという現状がある。遺伝医療の抱える問題について、より専門的な立場からサポートし、よりよい遺伝医療および遺伝看護の普及・発展を目指したシステム作りを行うべく、遺伝医療に携わる医師、看護師、心理士が集まり、たちあげられた「三重いでんネットワーク」の活動を推進・発展させるためにネットワークの活動を支援していく。

### II. 方法

三重いでんネットワークの活動内容を支援する。

1. 遺伝医療に関する情報交換、相互理解のための交流推進活動  
遺伝看護検討会の開催、患者会への参加
2. 遺伝医療に関する能力向上・啓発・広報に関する活動  
公開学習会の開催・三重県内各施設に出向いての公開学習会開催・テーマ別公開学習会の開催
3. 遺伝医療サービスの質的向上を図る。  
遺伝カウンセリング陪席時に必要なパンフレット等の作成



担当教員: 二村良子・竹本三重子

# 外国人の保健医療サポートシステム開発事業

地域専門ケア事業

## I. 目的

平成 19 年末における三重県の登録外国人数は 51,638 人(前年比 4.7%増)と過去最高を更新し、県の地域保健を考える上で外国人に対する保健医療問題はいま重要な問題となっている。そこで、将来的に外国人の保健医療サポートシステムを開発することを視野に入れ、昨年度実施した保健師を中心にした実態調査の詳細な検討を加えることにより、保健師の立場から見た地域における外国人保健サービスの実態と問題を明らかにすることを目的とした研究を行う。

## II. 方法

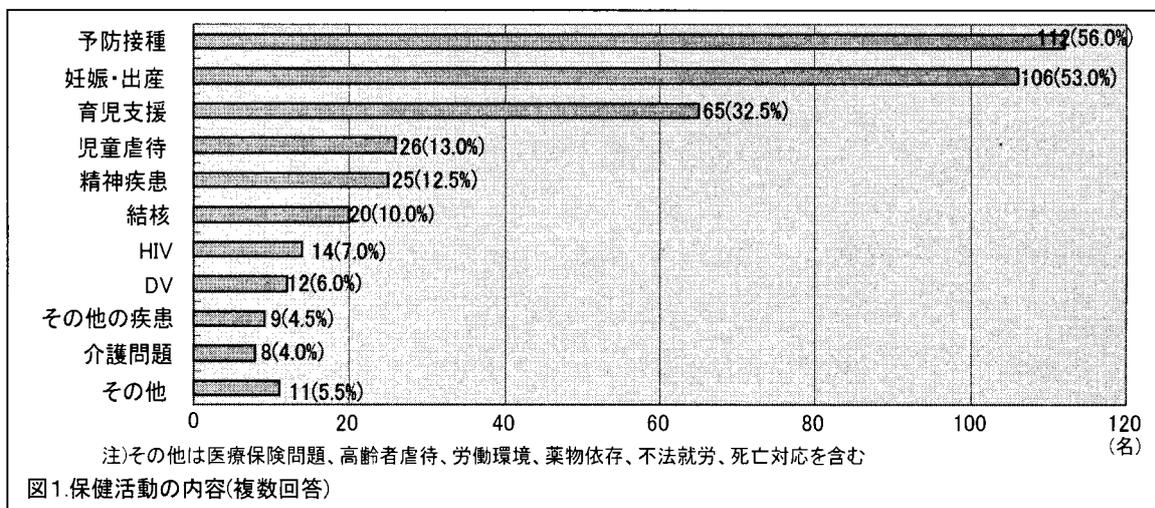
1. 平成19年度実施調査「三重県保健師の地域在住外国人への保健活動についての実態調査」の質的・量的な分析、検討
2. 地域で働く保健師からの聞き取り調査—(1)で明らかになった問題に焦点を絞る
3. 母子保健に関わる異文化理解のためのサポート方法を検討する。



## 平成19年度保健師への外国人保健活動実態調査結果より一部抜粋

保健活動の対象となった外国人の国籍について質問した結果(複数回答)、10 名以上の保健師が対象としたことがあったのは 7 カ国(ブラジル、フィリピン、中国、タイ、韓国・朝鮮、ペルー、ポリビア、インドネシア)の外国人であった。この 7 カ国の外国人への支援経験の有無と所属地域との関連を検討した結果、ブラジル、フィリピン、中国、タイ、ペルーの外国人への保健活動経験で地域間差を認めた。ブラジル、ペルー、中国人への対応は北勢、中勢に多く、フィリピン人は尾鷲・熊野地区に多かった。タイ人への対応は桑名・員弁地区と尾鷲・熊野地区で少なかった。

保健活動を行った領域の内訳(複数回答)は、母子保健 165 名(82.5%)、小児保健 55 名(27.5%)、感染症保健 33 名(16.5%)、成人保健 20 名(10.0%)、精神保健 19 名(9.5%)、福祉分野 13 名(6.5%)、高齢者保健 4 名(2.0%)、学校保健 3 名(1.5%)、難病対策 2 名(1.0%)、在宅ケア 1 名(1.0%)であった。活動内容の内訳を図1に示す。



担当教員: 橋本秀実・村嶋正幸・佐々木由香・山路由実子・伊藤薫

## 研修・研究支援事業

県民の皆様や地域の保健医療福祉職に対する研修支援

### 夢が丘県民講座 ケアする人のセルフケアセミナー

1. 対象 在宅での家族介護者、看護師・ヘルパーなどケアを職業とする方 30名
2. 内容

月 日	主な内容	講師
10月8日	講義およびワークショップ「ケアする人」の出会い	三重県立看護大学伊藤薫
	音楽で豊かなコミュニケーションを作ろう！～その1～	音楽療法士 伊沢径世氏
11月19日	自分を知って、上手にストレスと付き合いおう！	保健師・交流分析士 山口節子氏
	音楽で豊かなコミュニケーションを作ろう！～その2～	音楽療法士 伊沢径世氏
12月17日	よりよい対人関係を築くために	保健師・交流分析士 山口節子氏
	タッピングタッチを学ぶ、ふれあい、ケアしあう方法を学ぶ	ホリスティック研究所 中川一郎氏

担当教員：伊藤薫・日比野直子・灘波浩子

### 看護研究の基本ステップ

1. 対象 今後研究に取り組もうとする看護職 約40名
2. 内容

日時	講義内容	担当教員
8月7日	日頃の疑問を研究につなげよう！	佐甲隆・伊藤薫
	研究計画の立て方と書き方	臼井徳子
9月11日	質的研究	竹本三重子
	文献検索	伊藤薫
10月10日	英論文の読み方	山口和世
	量的研究	小池敦
11月14日	パワーポイントによるプレゼンテーション	野呂千鶴子
	統計は怖くない！ エクセルを使って楽しく統計解析	斎藤真

### 特定地域研究支援

特定地域病院	主な内容	担当教員
山田赤十字病院	看護研究研修会への協力看護研究推進チームへの助言等	永見桂子
紀南病院	個別看護研究指導、院内看護研究発表会講評	玉田章・平野真紀
県立病院看護研究発表会	看護研究発表会講評	中村恵・崎山貴代



## 産学官民共同研究

県内企業、地域産業と県民の健康生活および三重県のケアの質の向上を目的とした共同開発研究を行います。

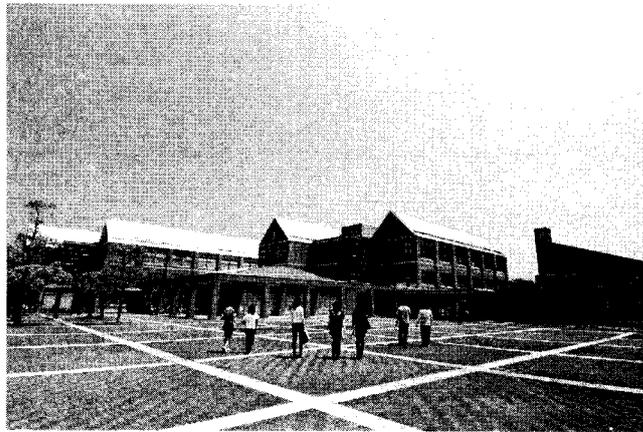
対象機関	主な内容	担当教員
三重県内企業・三重県工業研究所	水圧式駆動システムを用いた安全で人にやさしい沐浴装置の開発	斎藤真・村本淳子

### お問い合わせ先

三重県立看護大学地域交流研究センター事業に対するご意見やご相談等は、お気軽に下記連絡先へお問合せください。

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地の1

TEL: 059-233-5600 FAX: 059-233-5612



The map shows the location of Sanriku University of Nursing (三重県立看護大学) and its regional exchange research center (地域交流研究センター) in the area of Mogaoka (夢が丘). It highlights the JR Tsu Station (津駅) and the Sanriku University Bus (三交バス) routes. Key landmarks include the Sanriku University of Nursing (三重県立看護大学), Sanriku University of Nursing Regional Exchange Research Center (三重県立看護大学地域交流研究センター), and various bus stops like 'Sanriku University Front' (看護大学前).

三重県立看護大学地域交流研究センターまで  
の公共交通機関

- 三交バス：  
近鉄・JR津駅西口から看護大学夢が丘線  
「看護大学前」バス停下車徒歩1分
- JR紀勢本線：  
一身田駅下車徒歩約20分
- 近鉄・JR津駅下車タクシー約5分

### 3. 地域交流研究センター事業決算及び予算

1) 平成19年度地域交流研究センター事業決算額

(単位 円)

	計
報償費	707,205
旅費	911,735
需用費	2,198,921
消耗品費	1,474,199
印刷製本費	724,722
役務費	778,308
通信運搬費	737,720
手数料	40,588
使用料及び賃借料	46,510
備品購入費	593,155
合計	5,235,834

2) 平成20年度地域交流研究センター事業当初予算額

4,764 千円

## 編集後記

三重県立看護大学地域交流研究センター平成 20 年度年報が完成いたしました。ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

本年報には、課題研究、地域専門ケア、教育・研修開発および産学連携の 3 事業の活動内容と資料を収録いたしました。来年度は本学が独立行政法人化され、これまでの「地域交流研究センター」は、名称を改め「地域交流センター」とし、活動をさらに充実を図るために努力して参りたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

本年報を通じて、少しでも多くの皆様方に本センター事業の活動内容と地域貢献についてご理解いただければと願っております。

三重県立看護大学  
地域交流研究センター  
平成 20 年度  
V o l . 11

編集	伊藤薫
発行	三重県立看護大学地域交流研究センター
住所	〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1
発行年月日	平成 21 年 3 月